Cosmic Philosophy & UFOs

宇宙哲学とUFO

GAP JAPAN NEWSLETTER
季刊日本GAP機関誌

SPRING
1983
80

ファティマの大UFO事件

美しき惑星の思い出

聖書とUFO

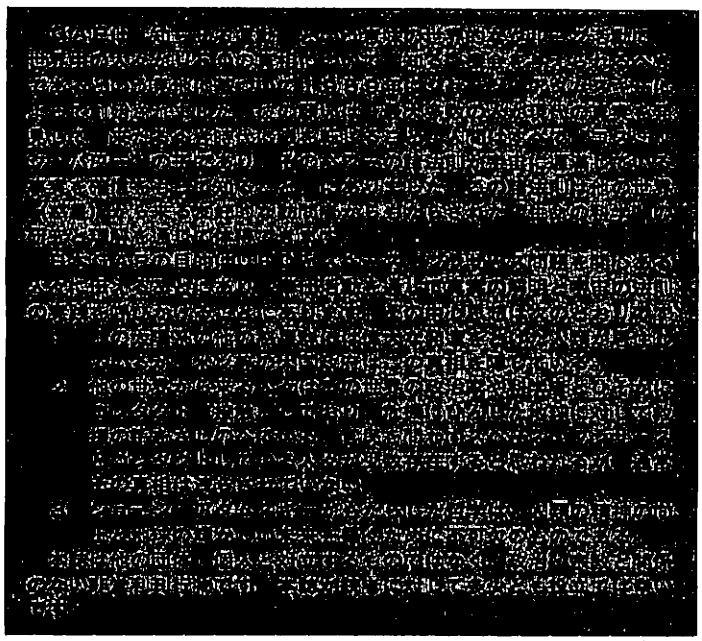
テレパシーと物理学

アダムスキー問題とUFO

宇宙哲学とUFO　第80号目次

<巻頭言>習慣的思考――1
ファティマの大UFO事件――久保田八郎 2
美しき惑星の思い出――中川真理子 10
GAPの意義――18
アダムスキーの著書――19
<さらば空飛ぶ円盤(8)>
聖書とUFO(2)――G.アダムスキー 20
82年度日本GAP総会賛歌――齋藤泰文 24
82年度日本GAP総会講演要旨
テレパシーと物理学――田中義則 26
アダムスキー問題とUFO――久保田八郎 29
「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅に参加して」(2)――32
<報告> 仙台・山形合同支部大会／熊本支部大会――34
<予告> 今年度地方支部大会(その1)――35
読者の声「コズミック・ポスト」――36
<予告> エルサレム宇宙考古学の旅――38
日本GAP全国月例研究会案内――40

GAPとは



■表紙写真はポルトガル、ファティマにおける5月13日の大聖堂前の大祭。数10万人の信者が集まる。

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共他の印刷物への無断転載を禁じます。

結婚式後の披露パーティーにおける男女の服装は国によって異なるが、日本の場合、男は一様に黒の礼服（洋服）を着用する。これが正式な礼装だと考えられているらしい。これにはシングルとダブルの二種類があるけれども、ダークスーツと呼ばれるこの服は欧米では礼装の部類に入らぬもので、だれがきめたのか知らぬがこれは日本だけの礼装である。

西洋の男子の礼装は昼がモーニングコート、夜はイーヴニングコート（燕尾服）で、夜の略式礼装はタキシードときまっている。中流以上の家庭の結婚披露パーティーでは男の出席者にタキシードを要求する例がまだあるが、（北欧は大体に黒か濃紺、暖かい国は明るい色も用いる）一般庶民の披露パーティーになると男はタキシードを（持っていても）着ないで、一張羅か最上等のスーツ（背広上下）に普通のネクタイをしめて色とりどりの姿で出席する。しかも現代の欧米ではこの方式がかなり普及しつつある。普通のスーツの方がむしろ華やかな雰囲気を生じるし、寛ぐからだ。

ところが日本では欧米で礼装とみなされない略式礼装にもならないダークスーツに白い礼装用ネクタイをしめて正式な礼装と思い込んで集まる。これは白人の目から見れば奇妙な光景なのだが、だれも気づかない。こんな格好をするよりは日本の民族衣装である紋付羽織袴姿にするか、または洋服に固執するのならば普通のスーツを着て集まる方がはるかによいのだが、そうもゆくまい（以上は都内某デパートの専門家の回答）。

〈巻頭言〉

習慣的思考

なぜこんな風習ができたのか。理由は簡単だ。「他人がみな〝黒の礼服〟を着て行くから自分も着なければおかしい」。ただこれだけのことだ。つまり習慣的思考に左右されているのである。

習慣的想念というのはおそろしい作用をする。他人がそうするから、他人がそう考えているから、というだけで自分の思考のパタンがきまり、固定概念が定着する。そして「こうでなくてはならない」と思い込んで、自分だけの価値基準を設け、それに束縛されて、合致しないものをすべて〝間違い〟として拒否する。こうした人々によって社会的に巨大な思考帯が形成され、風習となり、因襲や伝統となってゆく。

一般の奇妙な習慣を列挙すれば沢山ある。日本人はナイフとフォークで食事するとき、米飯をフォークのわん曲した山型の背中に乗せて食べる。これは白人から見れば目を丸くしたくなるような変わった食べ方なのだそうだが、だれもが平然とやっている。フォークを持ったらすくって食べさえすればよいのだ。これも他人がやっているからというので自然に習慣化したのだろう。

人間は習慣的想念の奴隷だといえる。地球が宇宙の中心に静止していて、太陽、恒星、惑星などあらゆる天体はそのまわりを回転しているという天動説を打ち破ったポーランドのカトリック聖職者ニコラス・コペルニクス（彼は天文学者というよりも聖職者が本業）の強力な支持者であるイタリア人修道士ジョルダノ・ブルーノを火刑に処したカトリックは、当時人間の習慣的想念の権化ともいうべき存在だった。二世紀のギリシアの天文学者プトレマイオスの著書「アルマゲスト」以来の伝統的概念たる天動説に加えて、キリスト教の傀儡となったスコラ哲学などの信条大系により、地球が太陽の周囲を回転するとは常識はずれもいいところで、神の手になる聖なる宇宙を冒瀆するものとみなされた。だれもがこのような習慣的思考のとりこになっていた。「他人がそう考えるから自分もそう考えるのだ」という無批判な盲従である。

アダムスキー問題もこの例外ではあるまい。「サギ師の妄説を信奉する素朴な（バカな）人々」と嘲笑する人たちこそ実は「地球以外の惑星に人間は存在しない」というプトレマイオス以来の習慣的思考に汚染されておりながら、みずからそのことに気づいていないのではあるまいか。なんとなれば前述の披露パーティーの服装のごとく、人間の習慣的思考は意外に他愛のないもので、個人が因襲という強大な壁を崩すのは容易ではないからだ。婚礼の席に日本特有のダークスーツなどを着て出るのは野暮ったいと思う海外生活経験者も、人がみな着るから自分もそうしなければ格好がつかないという、それだけの理由で出席することもあるだろう。同様に太陽系の地球以外の惑星に人間が住んでいることを考えたくても、そのようなことは絶対にあり得ないという大方の習慣想念に押されて、そのように思い込む人もあるだろう。ブルーノを焼き殺し、ガリレイを異端者審問所に引きずり出して所信を撤回させたカトリックのボスたちは、内心では地動説の正しさを予感して自分たちの権威の崩壊を恐れていたのではないだろうか。

ガリレイ没後三百四十年しかたたぬ一九八三年はエレクトロニクスその他の分野で科学的に驚異的な発達をとげている。アダムスキーをまたずとも、地球以外の惑星に高等な生物（人間）が存在し、想像を絶する文明を築いていることをすでに探知した国はあるはずだが、それを唐突に発表することは、十六、七世紀にカトリックがコペルニクスやガリレイの正当さを認めて脱帽する以上に大きな混乱をひき起こすだろう。科学技術が飛躍的に進展し、人間の頭脳が肥大化した今日すら人間は社会の古い伝統や因襲に取り巻かれ、習慣的思考から脱却できないからである。このことを発見者やそれをコントロールする為政者が気づかぬはずはない。他の惑星に関する驚倒すべき事実を公開して自分たちの利益にもならぬパニックを起こすよりは、大衆の習慣的思考を温存させて平穏を保つ方が有利かもしれない。おめでたい婚礼の席に平服のスーツで出席して顰蹙を買うよりも、だれもが着ている日本式礼服を着用して沈黙している方が無難だろう。だがこれでは進歩はない。

一九一七年（大正六年）、ポルトガルの寒村ファティマに驚天動地の大事件が発生した。有名な聖母マリアのアパリション（幻）の連続出現である。これは同年五月十三日から十月十三日までの六カ月間、毎月一回ファティマ村の牧草地コーヴァ・ダ・イリアで三人の牧童が空中に現れる不思議な幻影を目撃するという出来事で、最後の日などは実に七万人の大群集が注目するなかを太陽のような燦然と輝く大円盤が出現して飛行するというすさまじい光景が展開して、史上名高い聖母空艇の奇跡とされた。しかも聖母といわれる貴婦人の幻と牧童たちのコンタクト中に交わされた会話には意味深長な予言が含まれており、その一部はカトリックにより極秘にされているというので、これをめぐってさまざまの憶測が流れたり予言の解釈書などが出たりしている。そしてむしろ人心に恐怖を与える方向に動いていると思われるため、筆者が五十七年夏ファティマの現地をGAP旅行団と共に視察して入手した資料類を土台に考察し、一般に気づかれていない宇宙的な事由で事件の分析を試みることにした。事件の詳細は拙著「七つの謎と奇跡」（主婦の友社刊）の「ファティマの謎の太陽円盤」に述べてあるが、この事件は驚異的なUFO出現事件であったと思われるのに、すべてカトリックにより宗教上の神秘的な奇跡とされ、徹底的に利用されてしまったと考えられるので、ここにあらためて取り上げたのである。国内の資料はもちろん現地入手の資料もすべて宗教人によって書かれているため、きわめて英化され幻想化された箇所が多いので、そうした宗教色を払拭するのは困難だが、できる限り客観的に述べてみたい。またこの記事でカバーしきれない細部は前記拙著を参照されたい。

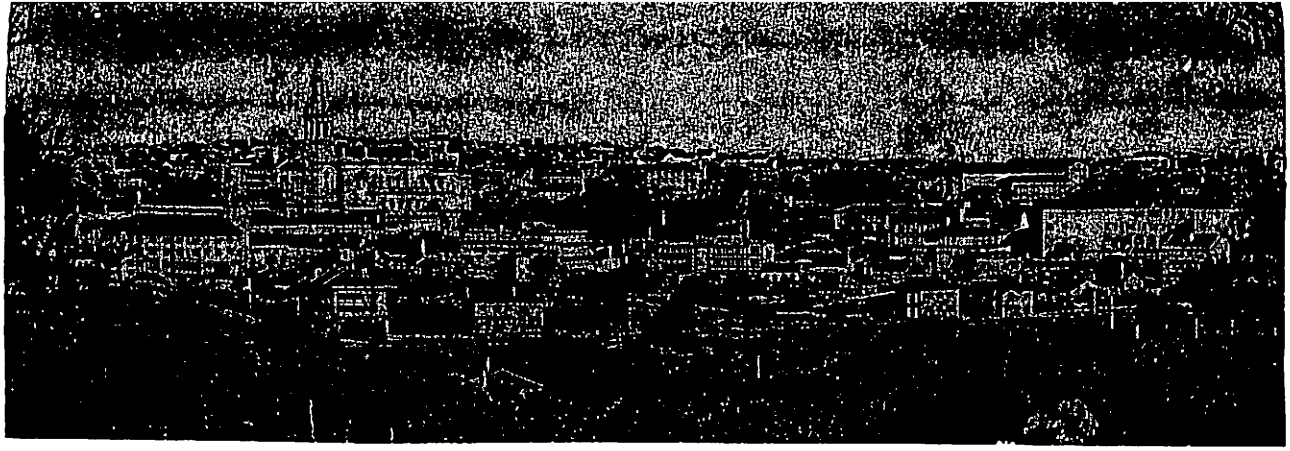
ファティマとは

イベリア半島の西南にスペインと背中合わせに横たわる茶褐色の大地ポルトガルはヨーロッパの最西端に位置する小国である。南部の海港都市で首都たるリスボンは石造の大建築物が立ち並ぶ格調高い大都市で、テージョ河畔に屹立するエンリケ航海王子の素晴らしい大記念碑が過去のこの国の栄光を物語っている。

このリスボンから直線距離にして約八十キロ北、太西洋岸の有名な漁村ナザレより真東三十キロの地点にあるファティマは、現在もまだ町の部類に入らぬほどの、「こんな山の中か！」と思わせるような辺ぴな場所だ。

三人の牧童というのはルシア・サントスという当時十歳の少女、そのいとこで九歳のフランシスコ・マルト、フランシスコの妹、七歳のジャシンタである。何度も言うことだが、日本のファティマ関係の本はみな申し合わせたようにルシアをルチアとし、ジャシンタをヤシンタとしているが、これは誤りで、ポルトガル語では Lucia の ci は英語の si と同じように発音し、Jacinta の Ja は日本語の「ジャ」と全く同じである。

さて、羊の放牧の世話をしていた三人がコーヴァ・ダ・イリアという広い草原



▲現在のファティマ中心部。左の塔のある建物が大聖堂。

地帯へ出かけて最初の貴婦人の幻影を見たのは一九一七年五月十三日だ。コーヴァ・ダ・イリアというのは七世紀頃にこの地に住んでいた聖女イリアにちなんで呼ばれるようになった地名で「イリアの窪地」という意味だが、実際は谷間ではなくて山に囲まれた広大な平野である。山に比較して窪地というのだろう。同年五月十三日以後は毎月十三日にこの地で三人の眼前に美女の幻影が出現して何事かを語りかけるので、噂が広まって毎月十三日になると近隣から大勢の人が集まるようになった。そして十月十三日にはなんと七万人の大群集が山を越えてやって来た。この経緯はあとで述べるが、実は三名が一七年に目撃を始めるまでの二年間に、空中に不思議な像と、平和の天使と称する〝人間〟が三度も子供たちにコンタクトするという奇怪な事件が発生していたのだ。

〝天使〟の出現

この出来事は美女の幻の出現ほどによく知られていないけれども、重要な意味をもつので取り上げることにしよう。

ルシアが後年司教に語る形式で書いた『思い出の記』の英文版によると、次のようになっている。

一九一五年のある日（日時と場所は不明）、羊をつれて野外へ出た三人が昼弁当を終えてロザリオの祈りを始めるとまもなく、ヒイラギの木々の上空に、まるで雪で作られたかのような真っ白い人間の像のようなものが浮かんでいるのが見えた。三人は恐れたが祈りを続けていると、やがて像は消えた。太陽の光で透き通るようだったという。この噂が村で広がって、ルシアは母親に詰問されたけれども、正確に答えられなかったので、母親はうんざりしたような表情で「フン、子供のたわごと！」ときめつけた。こうして一連の奇怪な現象が始まるのだが、両家の親たちは当初全く相手にしていなかった。しかし不思議な体験が重なるにつれて事態は深刻になり、ついに家族はおろか村中いや国中を巻き込む大事件に発展したのである。

翌一六年の四月のある日（前回と同様日時は不明）、三人はチョウサ・ヴェリャと呼ばれる丘の東側山麓の両親の所有する地所へ羊をつれて行った。この頃ルシアには他の牧童仲間が沢山いたのだが、いとこのフランシスコとジャシンタが羊の世話をする許可を両親から得ていたので、ルシアはなるべく親類のこの二人に接するようにしていた。

午前中のなかば――たぶん十時頃か――非常にこまかい霧雨が降り始めたので、三人は丘の上の突き出た大きな岩の下に入り込んで雨を避けた。やがて雨は上がって晴天となったが子供たちはそこで弁当を食べてロザリオをとなえ、小石遊びを始めた。

突然、突風が吹いて木々がゆらいだ。一同は上空を見て驚いた。オリーブの林の上空に大きな光る人像のようなものが見えたのだ。それは雪よりも白くて、日光が貫通するほどに透き通った、十四、五歳の少年の姿であった。それが空中から降下して、あっけにとられている三人の眼前の地上に着陸すると、すごく美しいその人は言った。

「こわがってはいけません。私は〝平和の天使〟です。私と一緒に祈りなさい」

彼は地面にひざまづいて、額を地に押しつけながら、三回ほど次の言葉を三人にくり返させた。

「わが神。私はあなたを信じ、敬慕し、期待し、愛します！　あなたを信じないで、崇拝もせず、期待もせず、愛さない人々にたいしてあなたのお許しをお願いいたします」

続いて〝透明人間〟は立ち上がって言った。

「このように祈りなさい。そうすればイエス様とマリア様の御心はあなた方の祈りに応えられるのです」

「この方の言葉は私たちの心にたいそう深く刻まれましたので、決して忘れることはできませんでした。それ以来私たちはよくこの言葉をとなえて、ついには力つきて倒れたものでした」とルシアは述懐している。

UFOの放射線による投映像か

ここで賢明な読者は気づかれるだろう。この空中に出現した透明人間や、後に続く〝聖母マリア〟の幻影の正体は何かということに！　これらは当時カトリックの信仰にこり固まっていたポルトガルの民衆にとって二千年前の聖母マリアや天使たちの再来とされて、そのように信じられてしまったけれども、これは宇宙的

性質を帯びた、ある物理作用だったのだ。

このとき上空に一機のUFOがいた！そしてある特殊な放射線を放射して三名に人間の投影立体像を見せた。一九一七年五月十三日のコンタクトの当初、フランシスコには美女の映像は見えなかったが、後には見えるようになった。この放射線は地球の科学レベルをはるかに超えたもので、上空の大母船から地上へ発射されて、特殊な潜在能力を持つ人間にたいして可視的となる。他の人には見えない。音声も特殊な波長のウェーヴで送られる。そしてやはり特殊な感覚器官により特定な人間のみにキャッチされるのである。幽霊現象が見える人と見えない人とに分かれるのと同様だ。これにはホルモン分泌腺に関係のある未知の感覚器官が作用すると考えられるのだが、地球の科学ではまだ解明されない。

この未知の器官の発達した人は特異な超能力を示すことがある。透視、テレパシー、その他の能力の開発にこれが関係している。三人の子供の場合は特に何らかの理由で上空のUFOからこの能力が顕現するように仕向けられたのだろう。

果たして聖母マリアか

ルールドのベルナデットの場合も同様のケースと考えられる。聖母マリアとおぼしき絶世の美女の幻影は彼女だけに見えて他の人には全く見えなかった。しかるに彼女の体験の内容は理路整然として、まやかしと思われるような部分はみじんもない。しかもベルナデットとコンタクトした美女がみずから『聖母マリア』と名乗った形跡はいかなる資料を調べてもないのだ。「あなたは、どなたですか？」とベルナデットが尋ねたら、美女は天を仰いでこう答えた。

「私は Immaculé Conception です」

このインマキュレ・コンセプシオンというフランス語は『無垢受胎』と訳されて、以来百二十年間、これは聖母マリアだと万人から信じられてきた。果たしてそうなのか？

いったい女が処女のままで子供を生むという例があるのだろうか。イエスの母マリアは許婚のヨセフと結婚しないうちに、ある日井戸へ水を汲みに行ったとき、天使ガブリエルのお告げの声を聞いてみごもったとされている。そこでベルナデットに現れた絶世の美女も文句なしに神秘的な聖母マリアの出現とされてしまい、カトリックの熱烈な信仰の対象となって、ガーブ河畔のマッサビエル洞窟には日夜ローソクの火が絶えない状態になったのである。ここへ行くと燃えるローソクの異様な臭気と狂信的な信者の祈りの声が渦巻いて複雑な気持になる。科学的思考や論理的判断などとは全く縁遠い場所だ。

それはともかく、インマキュレ・コンセプシオンという言葉にはもう一つの意味がある。それは「純粋な理解」という意味だ。つまり「私は完璧に悟った者です」ということになる。もっと言い替えると、「私は宇宙の法則を完全に理解している者です」となるのだ。これは超絶した文明を持つ別な惑星の人々の言葉であって、ベルナデットが目撃した絶世の美女というのは別な惑星から来た婦人の投影像であった！　おそらく近隣の惑星の女性であろう。

インマキュレ・コンセプシオンという言葉に別な意味があることに、なぜ人々は気づかないのだろう。それよりも二千年前に実在したイエスという人物の母親が、気が遠くなるほどの絶世の美女であったわけがない。しかしベルナデットが見た幻影は完全に宗教に利用されてしまい、彼女はカトリックにより聖列に加えられてしまった。それはよいけれども、なぜピレネー山脈のふもとの寒村に住む彼女にこのようなコンタクトが発生したのか、ここが問題だ。

異星人が接近？

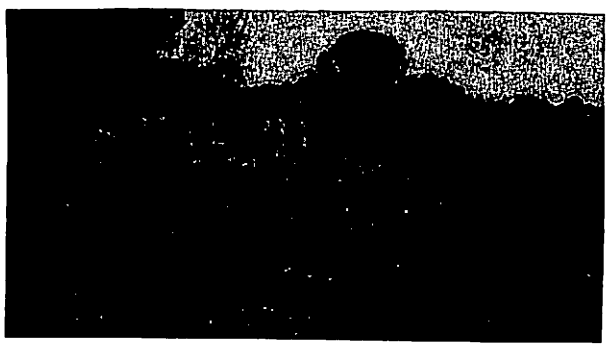
話をファティマにもどそう。一九一六年に三人の牧童には三回ほど〝天使〟が出現したことになっている。その二回目は夏のある日だ。シエスタという昼寝の時間に牧草地から帰宅した三人は、ルシアの家の裏庭にある井戸のそばで遊んでいた。この井戸は現在も昔のまま残っており、ここの水を飲むと病気が治るというので、多くのカトリック信者がやって来る。井戸端には水をつめるためのプラスティックの容器を売る人もいる。これもルールドの泉水と同じだ。

突然一人の見知らぬ〝男〟がそばに立って三人に話しかけた。

「あんたらは何をしているの？　祈りなさい。うんと祈りなさい。イエスとマリアの心はあんたらに憐れみの意図を持っておられます。〝いと高きもの〟にたいして絶えず祈りと犠牲をささげなさい」

この〝男〟というのが曲者なのだ。ルシアの表現によればやはり天使ということになっているが、これは前回のごとく空中から降下した透明人間ではない。ルシアの手記では文意が曖昧だが、察するに特殊な服を着た現実の人間であったと思われる。

第三回目の〝天使〟出現のときも状況は明確でない。だいいち日時などは全く記してない。学校にも行かぬ貧しい子供たちだから日付などは念頭になかったのだろう。場所はルシアの両親の地所でプレグェリアというオリーブの小森のある



▲第2回目の"天使"が出現した井戸（広場の左側）。※

地帯で、丘の斜面をまわった反対側の岩をよじ登ったあたりのくぼみに着いて三人で祈りを始めたときである。連れて行った羊の数も明らかではない。

ここで三人はすぐに地面にひざまづいて〝天使〟から教えられた祈りの言葉をとなえだした。額を地につけて、ひれ伏した格好だ。

突然、強烈な閃光がきらめいた。驚いた三人が飛び上がるようにして立ち上がると、例の〝天使〟が眼前に立っている。これも空中から降下した透明人間ではなく、生きた男の姿であったらしい。

「その人は左手に聖餐杯（台付きの大杯）を持ち、その上方の空間に聖体（ミサ聖祭で聖別されたパン）が浮いており、そのパンから聖餐杯の中に血液がしたたり落ちていました。すると〝天使〟は空間に聖餐杯を停止させたままで私たちのそばにひざまづいて、次の言葉を三度くり返させました。

『最も聖なる三位一体である父と子と聖霊に。主がみずから蒙った暴行、冒瀆、無関心などにたいする償いとして、この世のすべての聖櫃内にあるイエス・キリストの最も高貴なる体、血、魂、神性を捧げます。主の至聖なるみ心とマリアの無垢の心の限りない功徳によって、哀れたちの改心をお願いします』

それから〝天使〟は立ち上がって両手に聖餐杯と聖体を取り、聖体を私に与えてくれましたし、聖餐杯の中の血液をジャシンタとフランシスコに等しく分け与えながら言いました。

『恐知らずの人々によってひどい仕打ちを受けたイエス・キリストのお体を食べ、血を飲みなさい』

もう一度その男の人は地面に平伏して、先程の祈りの言葉を私たちに更に三度くり返させてから消えました」

ルシアの手記はやはり明確さを欠くけれども、なにぶん十歳かそこらの幼い頃の思い出だから無理もない。だが翌年に発生するアパリションの目撃事件よりも、前年のこの〝天使〟の出現がもっと重要な意義を含んでいると考えたい。なぜなら二度目と三度目に出現した〝天使〟の方が現実味を帯びているからだ。透明人間でないとすれば、だれなのか？

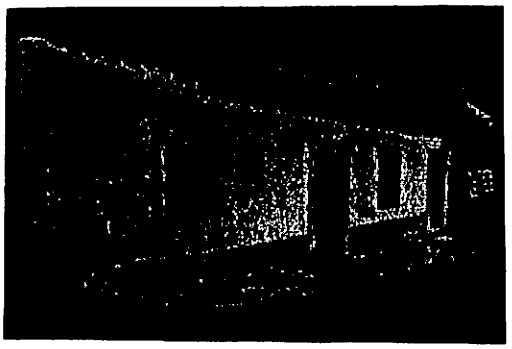
強大なカトリック信仰

現地へ行ってみるとわかるが、ファティマというのは最初に述べたように内陸部の山間地であって、しかも一九一六、七年は人口わずか二千五、六百人の貧村である。あっちに一軒、こっちに一軒というような過疎地であったろう。現在でも三人の生家が残っているアルジュストレル地区へ行くと、ろくに家は立ち並んではいない。全くの山中の部落なのだ。ヒイラギやオリーブの生い茂る平野や谷間に取り囲まれた村である。これなら山間部に上空から円盤が着陸するのは容易だろう。その円盤から出てきた異星人が特殊な服装で出現すれば〝天使〟のように見えたことだろう。あるいはそのように見せかけたのかもしれない。

一六年に二度も三人の眼前に現れた不思議な男、すなわち天使というのは異星人ではなかったか？　その前年には空中で透明人間の投影像を放射線で見せて、不可思議な現象の発生を〝予告〟し、これがあたかも宗教の奇跡であるかのごとく思い込ませることによって子供たちに安心感と一種の期待感とを与えようとしたものにちがいない。

いまもそうだが、いったいにポルトガルは隣国のスペインやフランスと同様、強大なカトリック信仰に支えられた国である。この信仰なくしては夜も日も明けないほどで、キリストと聖母マリア崇拝は生活に根強く密着していた。

子供たちは幼児より両親からカトリックの教義を教え込まれ、七歳になると初聖体拝領のための暗唱テストを教会で受けて、合格すれば聖杯をかたどった容器が与えられる。これで一人前の信徒になり、クリスチャンとしては大人の仲間入りをすることになる。都会地よりも田舎になるほどこうした信仰の基盤や雰囲気が濃厚であり、ファティマ村も例外ではなかった。したがってルシア、フランシスコ、ジャシンタの三人だけが篤信であったというわけではない。一般の子供もよくロザリオを手にしては祈りの言葉をとなえるのが日常の習慣であり、必須の行事であった。だから三人が羊をつれて放牧に出るときはロザリオをいつも手にしていたのである。当時三人が持ち歩いた品物は白いビーズ玉のロザリオ、小さなカゴ、それに日本のドビンに似たコーヒーポットぐらいのもので、これらは現存している。食うや食わずの生活だから持物らしいものはほとんどなかった。三人の生家に保存されている幼児期に使用したベッドにしても実に粗末なものだ。



▲フランシスコとジャシンタの生家。※

ホログラフィー効果か

だが異星人はこの幼児三人にコンタクトを決定した。なぜか？　理由は不明であるけれども、考えられるのは、三名の比類なき純粋さ、正直、子供ながらも至上なるものにたいする強い崇敬の念などによるのであろう。根本的には宇宙的なカルマを持っていたことによると思われる。

当時、UFOという言葉は存在しなかった。まして地球外惑星から飛行物体が来るなどという概念は皆無であり、生活のすべてがイエスとマリアで占められているカトリック国民たるポルトガル人に

とって、大気圏外から人間が来るなどとは逆立ちしても考えられなかったことだろう。現在も一般人でこれを信じている人はあまりいないのだ。

こうした場合、恐怖を起こさせぬようにコンタクトするには、彼らの宗教心に合わせた方法をとるのが最良である。最初は空中に透明な人体像を出現させて天使のごとくに見せかける。次に付近に円盤で着陸し、そこから特殊な服を着て三人に接近する。しかも手にはだれもが見慣れている聖餐杯を持ち、キリストの御使いのごとくに思わせる。この聖杯を重力を遮断する方法により空間に浮かばせ、奇跡のごとくに見せて、天使であることを〝証明〟する。赤色の果実酒がその中に流れ込む。〝天使〟は地面にひれ伏して祈りの言葉をとなえ、イエスとマリアの名を口にする。子供たちは大いなる畏怖の念に打たれて、祈りの言葉を三度となえる。この祈りの言葉なるものは分析してみると宇宙の法則を示唆したもので、決して不自然ではない。

空中に人体像を出現させることは異星人の超絶した科学によれば朝飯前だろう。地球にだっていまはホログラフィーという三次元画像（立体像）を空間に出現させる、いわば立体写真法が可能になっているのだ。これは物体をレーザー光線で照明し、その表面で散乱した光とレーザー光の両方で照射された空間に乾板をおいて、両方の光の干渉じまの形で撮影する。これを現像してから、ホログラムと呼ばれる干渉じまを元のレーザー光で同方向から照射すると、空間に立体像が浮き上がる。昭和五十三年に東京で『世界のホログラフィー展』が開催されたときに筆者も見学したが、科学もここまで進歩したのかと驚嘆した思い出がある。いずれは何もない空間に立体映画を映写することは可能になるだろう。

アダムスキーが金星の大母船に乗り込んだときに、スクリーンのない空間に金星の光景が立体的に写し出されて驚いたとある部分を、そんなことができるわけはないと嘲笑した人もあったようだが、ホログラフィー効果を考えるならば、これは決して夢物語ではない。

第一回の幻影（アパリション）の出現

それはさておき、翌一九一七年には劇的な出来事が次々と発生した。

最初は五月十三日である。ルシア、フランシスコ、ジャシンタの三人は快晴のこの日、羊たちをつれて、家から二・五キロ離れたコーヴァ・ダ・イリアの大牧草地へ着いて、弁当を食べたあと、ロザリオをとなえ、石ころを集めて家建て遊びを始めた。

正午を少しすぎた頃、突如、上空に閃光がきらめいた。カミナリかと思って帰り仕度をしていると、すぐ眼前の高さ一メートルのヒイラギの木の上に、ものすごく美しい女性が空間に立っている！

恐れおののいている三人の目に映った姿は、純白の長いドレスを着て、首からは金色のネックレスを胸まで下げ、両肩には黄金色のふちのついた長いマントをはおり、右手には輝くロザリオをさげて、胸に両手を組み合わせている高貴な顔をした十八歳ぐらいの絶世の美女であった。

落ち着きをとりもどしたルシアが、どこから来たのかと尋ねると、美女は天国から来たと答え、これから毎月十三日にここへ来てくれ、十月には私の正体やあなた方にたいするお願いなどをお話ししようと言い、更にそのあと、神の栄光を汚す人間の罪をつぐなうために進んで犠牲となれ、とかなんとか話す。そして毎日ロザリオをとなえて祈りを続けよ、世界が平和になるように、と言う。

語り終わった貴婦人は足を動かさずに直立したまま空中へ上昇して消えて行ったという。このとき上空に円盤か母船がいて、放射線（ビーム）を送りながら立体像を見せた上、音声も送ったのだろう。これも一種のホログラフィー効果なのだ。

ただしこのとき映像が見えたのはルシアとジャシンタだけで、フランシスコには像も音声も感知できなかった。ここらが神秘的なところで、だれにも見える客観的な映像ではないらしい。先に述べたように、肉体内の何かの眠った器官が活性化した人だけに見えるという性質のもので、これはルールドのベルナデットの場合と同様である。

この事件はたちまち村人に知れ渡って子供たちにはトラブルがつきまとうことになった。信ずる者と信じない者との闘いも展開した。

六月十三日にも同時刻にまた貴婦人の幻影が出現した。約十五分間でコンタクトは終了したが、このときは来月十三日にも来ること、そして毎日ロザリオをとなえること、読み書きができるように勉強すること、そうすれば私の望みを話そうと告げて去った。この二回目のときには約五十名の村人が見守った。もちろん彼らには貴婦人の幻影は見えないが、貴婦人が上昇するときにヒイラギの木の枝がその衣服で引っぱられるかのように空中の方へなびくのを目撃した人が群集の中にいた。これで数十名の支持者が生じたのである。

ファティマの予言

三回目の目撃は七月十三日に行われた。だがこの頃ルシアはトラブルの渦中に投げ込まれて苦しみ続けていた。信じない家族や神父たちの詰問、弥次馬の嘲笑、支持者たちの応援などで、もみくちゃにされるのだ。

十三日にコーヴァへ着いてみると、数千人の群集がひしめいている！　閃光がきらめき、また映像が現れて、今度は秘密を厳守せよと命令した上で、重要な予言を伝えた。これが世に名高いファティマの予言といわれるもので、解釈をめぐってさまざまの憶測が流れていることは前述のとおりである。

この予言をここで詳述する余裕はないけれども、要約すると、罪人（つみびと）のために犠牲になること、彼らを救うには主の汚れなき御心にたいする信仰を高めること、戦争（第一次大戦）は終わりに近づいた。しかし人間が神に逆らうことをやめなければ次の法王（ピオ十一世）のときにまた大きな不幸が起こるだろう（これは第

二次大戦となって的中した)。いつか夜間に不思議な光が発生するが、これは戦争、飢饉、法王と教会にたいする迫害の始まりで、世界にたいする神の第二の天罰のシルシ。私(貴婦人)の願いを聞き入れるならばロシア(ソ連)は改宗し、世界は平和になる。さもなければロシアはその誤りを世界にまき散らして戦争をあおりたて、教会を迫害し、多くの国が滅亡する(このあとの部分は秘密にされている)。その結果ロシアは改宗し、世界に平和が来る。

右の隠された部分は第三次大戦を予言したものだとか全面核戦争だの、さまざまの憶測が流れているが、真相は不明である。やたらと恐怖心をあおりたてるような解説本が多いようだが、これには注意を要する。

八月のコンタクトはいつものコーヴァ・ダ・イリアではなく、自宅から約一キロ離れたヴァリーニョスという林間の平地で十三日ではなく十九日に発生した。

十三日に三人はコーヴァへ行ったけれども、子供たちが虚言を吐いて芝居を演じているとみた郡長のアルトゥール・デ・オリベイラ・サントスという悪名高い男があの手この手で三人の〝ウソ〟を白状させようとして妨害していたのだが、この日、三人をだましてつれ出したからである。期待はずれの二万人の大群集は〝やかましいブリキ屋〟というあだ名の郡長をやっつけろと騒ぎ出した。しかし上空に閃光がきらめいて、美しいひとかたまりの雲が降下してヒイラギの木の上にとまり、十分後に上昇したので、群集は聖母の降臨だと歓声をあげた。

一方、三人を捕えた郡長は三日間、子供たちを牢に入れて責めまくったが、子供たちは絶対に偽証をせずに、事の真実性を強調し続けたので、郡長はついに釈放した。だから八月のコンタクトは十九日になったのである。

この日ヴァリーニョスの現場へ行ったのはやはり羊の放牧のためで、居合わせたのは三人とジャシンタの兄のジョンだけであった。ここで出現した貴婦人は三人にいたく同情し、反対者を憎まないこと、苦行を実行し、罪人(つみびと)のために祈り、犠牲を捧げることなどを語った。このときジョンには貴婦人の姿は見えなかったが、相手が上昇するとき空中に爆発音を聞いたという。

ヴァリーニョスの草原はいまも昔のままの静寂な面影を残しており、貴婦人が出現した位置にはマリア像を収めた小さな堂が建立されている。

◀一九一七年十月、貴婦人の幻影が出現した位置に建てられた粗末なアーチの下に集まった、左よりフランシスコ、ルシア、ジャシンタと巡礼者たち。

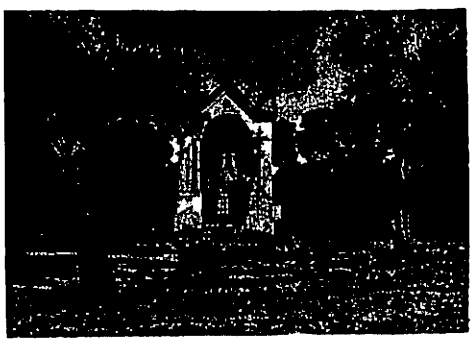
九月の白銀色のUFO

九月十三日。この日コーヴァ・ダ・イリアの平原は推定二万五千人ないし三万人の群集で埋まり、立錐の余地もなかった。すでに噂がポルトガル全土に広がっていたのだ。バスのない時代にこんな山の中へどこからどのようにして来たのだろう。空中現象よりもこの方が不思議なぐらいだ。

正午頃、すでに〝有名人〟になっていた三人の子供がひざまづいて祈りを始めると大群集もいっせいにひざまづいた。

まもなく大歓声がとどろいた。太陽が急に光を失って、コーヴァ一帯が黄金色に輝くと、上空に銀白色に輝くタマゴ型の物体が出現し、ゆっくり東から西へ飛行して三人の頭上で消えたのだ! すぐに貴婦人の幻影が現れて、ルシアは何事かをつぶやきながら会話を続けた。人々は彼女を凝視する。

やがて語り終わって「聖母さまがお帰りです」とルシアが叫ぶや、またも歓声がどよめいた。銀白色のタマゴ型物体が再度出現してゆっくりと上昇するのだ! これは聖母マリアの乗物にされてしまって、「聖母の輝く空艇」と呼ばれている。



▲ヴァリーニョスの8月のコンタクト現場。※

▲1917年10月13日、7万人の大群集が押し寄せたコーヴァ・ダ・イリア

またこのとき上空から真っ白な綿状の物質が降ってきたが、地上にとどかぬうちに消滅した。これはUFO出現時によく発生する『エンゼルヘアー』の典型的なものである。

七万人が目撃した大奇跡！

コンタクトの最後の日である十月十三日となった。この日に一大奇跡が発生するというのでコーヴァは実に七万人の大群集で埋まった。海外から来たジャーナリストや教会関係者も多数いる。

だがあいにくこの日は土砂降りの雨となり、平野はぬかるみと化した。しかし人々は天空を凝視しながら奇跡を待つ。

「あ、あそこに貴婦人さまが！」

叫ぶルシアの立つ地面から小さな白雲のようなものがわき出て三人の子供の足元を包み、上昇した。これは多数の人にも目撃されて驚きの声があがった。貴婦人も出現してルシアとコンタクトを始めたが、なぜか今日はフランシスコにもよく見えた。貴婦人は以前と同じような説教をする。やがて上昇して行ったあと、突然、黒雲が割れて、青空をバックに銀白色の巨大な円盤状物体が出現し、無数の色光を放射しながら急速に自転を始めた！　七万人の大歓声がこだまする。

群集の驚異と畏怖の念は頂点に達した。

「奇跡が発生した！」

「ファティマの聖女、マリアさま！」

「われらに憐れみと祝福を！」

人々は興奮と熱狂でわれを忘れ、コーヴァは祈りの声、賛美歌、叫び声の坩堝と化した。約十分間見えた不思議な物体は姿を消したが、大群集はいつまでも空中を見つめ続けた‖2頁の写真。

これを太陽の誤認だとか、マス・ヒステリーの産物という人もある。UFOや空飛ぶ円盤というものの知識が全くなければ無理もない。だが当日はインテリ層もかなり混じって目撃しており、それらの証言によると、絶対に太陽ではなく、不思議な物体だったという。コインブラ大学教授アルメイダ・ガルレッテ博士も、物体の外観は良質の真珠のような透明な物で、それ自体の色も影もなく、銀色の貝がらを削り取って磨きあげた車輪のように見えたと述べている。

突然この円盤型物体は揺れ動いて、ある唐突な運動を行い、次に火の車のように急速に回転し、巨大なランプのような輝く色光を放ったが、この色光は次々に緑、赤、青、紫に変化したという。これもUFOの出現時によく発生する現象である。

▲コンタクト現場で祈る左からフランシスコ、ルシア、ジャシンタ。

これでよいのだ

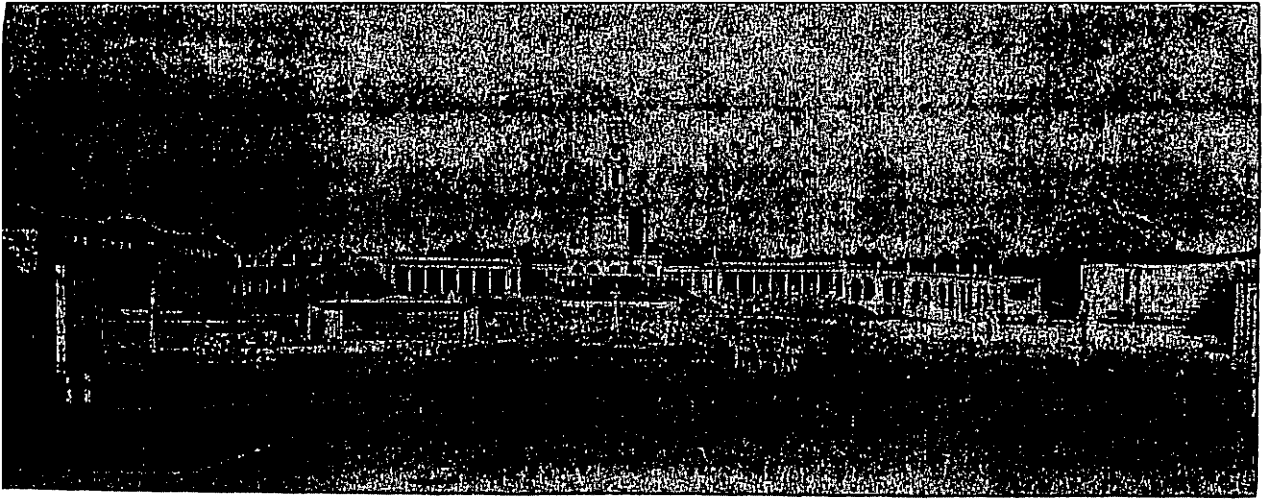
しかし七万人を驚愕させた大事件は宗教のモヤの中に包まれてしまい、巨大なUFOは聖母マリアの空艇とされて、神秘と奇跡の中に閉じ込められてしまった。

大草原地帯のコーヴァ・ダ・イリアにはいま大聖堂が建立され、広大な敷地はコンクリートで舗装されて跡形もなく整備されている。大聖堂に向かって左側の貴婦人とのコンタクト地点はガラス張りの建物で覆われ、ここにも聖母マリア像が安置してある。毎年この地には五月から十月にかけて毎月十二日と十三日に信者が殺到するが、特に五月の十三日には全国や海外からの巡礼者が五十万から百万人も訪れる。奇跡的治癒を願ってやって来る重病人も多数おり、実際に治る例も少なからずあるということだ。

これでいいのだろう。彼らが魂の平安と人生の希望をこの地に託して心の安らぎを得ることができれば、マリアと思わせた異星人の意図は成功したといえるだろう。精神的なより所のない、物欲に満ちた人間が闘争で明け暮れするよりも、貧しくとも信仰を基盤にして平和に暮らせる方がはるかによいのだ。

フランシスコは事件から二年後に猛威をふるったスペイン風邪にやられて、一九年の四月四日に気管支肺炎により他界した。死の瞬間まで苦しいとは言わず、周囲の人々に心から感謝の言葉を述べて、わずか十年の短い生涯を終えた。

妹のジャシンタも風邪が悪化して、ひどい化膿性肋膜炎となり、リスボンの、ドナ・ステファニア病院で大手術を受けたが治療の甲斐なく、二〇年の二月二十日金曜日の午後十時、静かに別れの言葉を告げて十一歳足らずで地上を去った。臨終近い頃、見舞いの婦人たちの派手な服装を見てつぶやいたと記録されている。



「あんな格好をして――。あの人たちが永遠とは何かを理解していたら――」

この二人の遺体はいまコーヴァ・ダ・イリアの大聖堂内に安置されている。二人の早世は二回目の貴婦人とのコンタクトでルシアに予言されていたものだった。

ルシアは現在高齢ながらもコインブラの修道院で健在だという。

付記

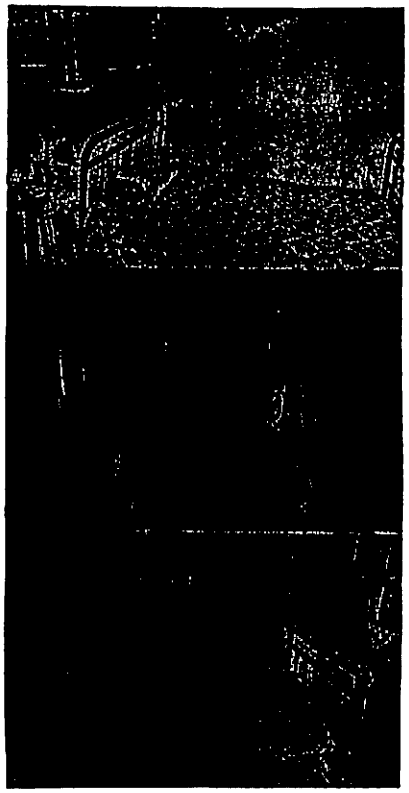
筆者は宗教上の奇跡的事件をすべてUFOと関連づけようとするものではないが、ファティマとルールドに限って現地視察により強い印象が生じたので簡単にまとめてみた。本号別掲記事『美しき惑星の思い出』を参照された読者に思いあたるフシがあれば幸いである。

〈掲載写真の内、※印は筆者撮影。その他は現地入手資料〉

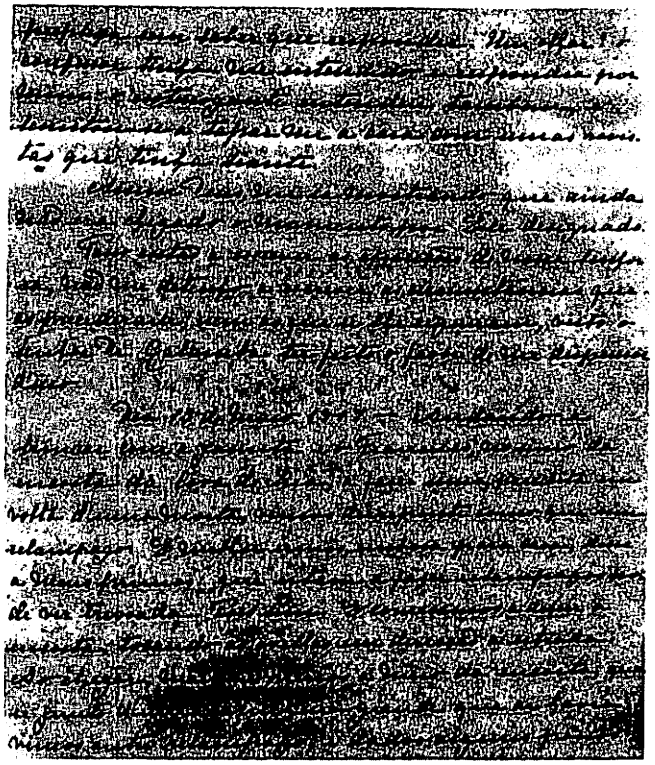
▲ガラス張りの建物。※

▲ファティマの大聖堂。中心より左寄り前方のガラス張りの建物が貴婦人の幻影を目撃した場所。※

▼現在も各生家に保存されている3人の子供のベッド。上からルシア、フランシスコ、ジャシンタの使用したもの。※



▼ルシアが書いたポルトガル語の「思い出の記」。下半分は「1917年5月13日。コーヴァ・ダ・イリアの斜面の上の方で、私はジャシンタやフランシスコと共にハリエニシダの草むらのまわりで小さな石壁を建てながら遊んでいました。突然私たちはカミナリの光のようなものを見ました……」と書いてある。



別な惑星から転生した？若き女性が語る不思議な体験と宇宙的な目覚め。

美しき惑星の思い出

中川真理子

世の中には科学的な解明のつかぬ不可思議な現象がある。テレパシー、透視、過去世と未来の透視、予知その他もろもろの体験を語る人は少なくない。これらは究極には物理的なものであるかもしれないが、現代の科学水準はメカニズムの解決にほど遠い。しかも具合がわるいのは、一般ではこうした現象をすべて心霊の分野に投げ込む傾向があることだ。

アダムスキーによれば死者の霊が生ける人間をコントロールすることはあり得ないという。なぜなら人間の死の瞬間に本人の〝実体〟は数秒間で別な新生児の肉体に移行するからである。こうして人間は〝転生〟（生まれかわり）をくり返す。この転生は地球上ばかりでなく惑星間でも行われるという。偉大な発達をとげた惑星から地球人の援助を目的として地球に転生する例もあり、二千年前のイエスや十二使徒はその部類に属するとア氏は述べている。この転生の実例はインドでも数件発生したことが調査により判明している。不可解な光景の透視や強烈な過去世の記憶などをもつ人は転生の実証者ではないだろうか。

筆者は秋田市に在住する日本ＧＡＰ会員。幼少の頃より多くの不思議な体験をもち、その真意が理解できぬままに悩みながら成長して、高校生の頃に初めてアダムスキーの『宇宙からの訪問者』を読んでいたく感動し、自己の不可思議な体験のすべてはこの書物に関連があったことを知り、以来、宇宙への道を歩んでいる比類なく純粋にして高貴な女性である。

初めて母船を見る

三〜四歳の頃、私は母とすぐ下の妹と三人で夕日を見ていました。私は地面を見ていたんですが、突然足もとに影ができたので、上空に何か光をさえぎる物がいるのかと思って上を仰ぎ見たところ、黒くて細長い物体が空中に浮いていました。子供ごころに非常に奇妙に思って、母に「あれは何？」と聞いたんですが、母は明確な返事をしませんでした。私は少しくやしくて、大人ならわかるはずなのにと思ったけれど、母は何も答えないで家へ帰ったんです。

いま思えば、あれはたぶん母船（注＝別な惑星から来る巨大な葉巻型宇宙船）だったと思います。その光景はいまでもはっきりと覚えています。しかし母は全く記憶しておらず、妹も見なかったと言っています（注＝筆者は双子姉妹の姉）。その場所は秋田市内のどこかですが、正確な地名はよくわかりません。もちろんそのときは「母船」という言葉も知らず、ただ不思議だなと思っただけです。

美しい男女が出現

同じ年頃ですが、ある夜中に目が覚めました。フトンから顔を出してふと見ると、室内に人間がいるんです。それは女性で、椅子みたいなものに腰かけていました。私は子供ですから恐ろしいという気持は全くなく、そのほうを見つめたのですが、その女性の顔は優しいフィーリングに満ちて、微笑を浮かべているんです。それで安心して、このきれいな女性はだれなのだろうかと思っていました。

真っ暗な室内なのに、その人のいる所だけがボーッと明るくて、その人は白い服を着ていて、マリアさまみたいでしたが、そのそばに男の人が立っており、二人ともあたたかい感じでした。幽霊のようなかすんだ像ではなく、実在する人物のように見えました。

私はタタミにしいたフトンの中から見上げたんですが、その女の人は私のほうを見おろしているのではなくて、本を読んでいました。それをすぐ下から見上げていたんです。

このことはかなり後になって妹に話したんです。そうしたら妹も見たと言いました。でも私が見たときは妹は眠っていましたし、妹が見たときは私が眠っていたということです。その女性の優しい笑顔はいまでも奇妙にはっきりと覚えています。それは白人タイプの顔で日本人ではありませんでした。

嵐の夜のＵＦＯ

十五、六歳のとき、ある夜父がなにげなく家から外へ出て、また屋内に入ってから「円盤がいるからみな外に出てこい」と言うんです。父はよく冗談を言う人なので、半信半疑のまま外へ出たんです。

その日はひどい嵐で、雨が降っていて、星などは全然出ていない夜だったのです。でもオレンジ色の光体が空に浮かんでいたんです。星よりもずっと大きな物体でした。すぐ下の妹は「こわい」と言ってすぐ家の中へ入ってしまいました。父もすぐ家の中に入ったのですが、私は全然こわくなくて、面白かったから最後まで見ていたんですが、その物体はゆっくり移動して西の空のほうへ沈んで行きました。

『宇宙からの訪問者』に感動

十六歳の高校一年生のとき、『コズモ』という雑誌を読んでいたら、アダムスキーの『宇宙からの訪問者』の広告が出ていたので、それを地元の書店に注文して取り寄せてもらい、読んだのですが、そのときは「これだ！」と思って、探し求めていたものを見つけたような気がしました。他の人にはわからないだろうが、この本だけが私の友達だという感じがして、涙を流しながらすごく読みまくりました。それを読んでから私が大きく変わってきたんです。

読後、また円盤を見る

『宇宙からの訪問者』を読んで気分がすごく高揚していたある日、学校から帰ったら、今日は絶対に円盤が見られるという感じがするので、夕ご飯の時間になるまで家の外に出て立ったままジッと空を見ていたんです。でも何も出現しないので、家に入って夕食をとりました。そして食べ終わるとすぐにまた外へ飛び出ました。

そしたら円盤が見えました。食事中も何かに呼ばれているような気がして胸騒ぎがして、いても立ってもいられないという感じがするので、食事が終わったら外へ飛び出たんです。

西の空でしたが、目を向けた方向に光体が出現していて、二回点滅しながら下へガクンガクンと降下して雲の中に消えて行きました。

家に入ってから「いま円盤を見た」と言ったんですが、私しか目撃していないもんですから、だれも相手にしてくれませんでしたが、あれは絶対に私のために出現してくれたんだと確信しています。

オーラを透視する

『宇宙からの訪問者』を読んで数カ月たってからのことです。高校時代のバス通学の頃で、バスから降りたときに自分の手をふと見ますと、真っ赤な色が手をとり囲んでいるんです。びっくりして「これは何だろう」と思って見ていました。

そしたら道路をむこうから歩いてくる人がいたので、それを見ると、やはり真っ赤な色がその人の体をとり囲んでいるんです。それで他の人たちを見ますと、その赤い色光に包まれている人と、そうでない人とがいることに気づきました。びっくりしましたが、べつに気にしないことにしていましたところ、数日後にまた見えたんです。

テストの答案を教室で受け取るときにクラスメートの手から赤い色の光が出ているのが見えました。そのようなことが何回かありました。

私は目がわるくて――〇・一ないだろうと思いますが――そのために見えるのだろうといままで考えていたんですが、今年（五十七年）の六月頃から自分がすごく変化してきたんです。以前よりも物が違って見えるんです。なんというか、あらゆる物体をボーッとした何かが囲んでいるんです。でも色は見えません。よく夜中に目を覚まして真っ暗な室内なのに手をかざしますと、やっぱりなにかボーッと光ったものが手を囲んでいるのが見えます。もしかしたら、これがオーラかなと思うんですが、はっきりしません。

光の粒が空中に舞う

これはオーラに関係があるのかどうかわかりませんが、光の粒が空中を動くのが今年になってから見えるようになりました。こうして久保田先生と話し合っていてもゴールド（黄金色）の粒がポンと出てきて、空中をふわふわと移動するんです。すぐ消滅しますけど――。ゴールド以外にもいろいろな光の粒がそこらを飛びまわるのが見えることがあります。こまかい光の粒が、目を閉いてもつむっても、夜中でもぐるぐると動きまわるんです。

これはだれにも見えるのだと思っていたもんですから、人に「見えますか」と尋ねてみるんですが、みな見えないと答えるんです。

『宇宙からの訪問者』の中に、アダムスキーが暗黒の宇宙空間で花火大会のようなすさまじい光景を見たと書いていますが、あれに似ていると思います。

久保田先生が東京月例会で講演される『生命の科学』の解説講義の録音テープを聞いているときなどは特にすごいんですよ。ゴールドの光の粒と紫色の光の粒が沢山現れてキラキラ光りながら暗い室内を渦巻くような現象が起こるんです。「わあ、すごいなあ」と思いながら見とれていますと、うっかりして先生の声を聞きもらしたりします。これは支部の月例会の会場ではなく、支部代表の方から録音テープを借りて、自宅で夜フトンの中に入って横になったままテープを聞いている場合のことです。

金星の光景を透視？

十五歳の中学三年のときでしたが、夜中に目を覚ましたら、突然、ある光景が見えたんです。まるでテレビの画面を見ているように鮮明に目に映るんですが、それが左から右にゆっくりと流れるように展開しました。

その場面はすごく近代的な部屋で、すごく清潔な張りつめたような空気が感じられました。とにかくその部屋はきれいで、すぐにキッチンルームだという印象を受けました。それを見ていると、ひどく懐かしくて、涙が出て仕方がありませんでした。学校の授業中でもその光景を思い出すと涙が出てくるんです。

その台所にはいろいろな台所用品のような物がありましたが、この世のものとは形が違っていました。いま考えれば、金星のある家の中だったような気がします。

話がとびますが、今年の七月にも部屋が見えたんです。たぶん同じ家だと思いますが、家具が全然ないんです。白い壁だけで窓が一個ありました。薄い透明な感じのカーテンがかけてあって、風が部屋の中に入ってきて、カーテンがふわふわと動いているんです。気候は春みたいな感じで、すごくのんびりした平和な光景でした。これもたいそう懐かしく感じられてキッチンルームと共通したフィーリングが起こりました。これも地球の光景とは違って、非常にあたたかい、なごやかな雰囲気でした。

この光景もテレビの画面を見るように鮮明に見えたんですが、カラーではありません。どちらの場合も夜中のことで、目をあけても閉じても見えるんです。

キッチンルームの光景では、丸いテーブルみたいなものがあるのを私が見上げているんです。だからこれは私の子供の頃の記憶が映像化したのかもしれません。

ごく最近、先生の『生命の科学』の解説テープを自分の部屋で聞いていたとき――暗い部屋でしたが――突然、目の前に山の景色が現れました。「あ、これはどこの山だろう？」と思いながら見ていますと、その景色が目の前で移動するので、まるで自分が歩いているような感じがするんです。でも自分は自宅で椅子に座っていることがわかるんです。

するとそのうちに山の景色が終わって、今度は私が上空から下界を見おろしているような状態になっていました。美しい建物がきっちりと並んでいて、その建物のあいだに人工的な大きな水路がありました。それを私が空中から乗物に乗って見おろしているんです。そういうこともありました。勝手な推測ですけど、地球ではないみたいでした。

私のすぐ前の過去世が金星人だったのではないかとおっしゃるんですか？　さあ、それはどうでしょうか。でもアダムスキーの『宇宙からの訪問者』を私は泣きながら読んで、金星という惑星がひどく懐かしくなってきて、なんとかして金星へ行きたいと思うようになりました。しかし、いまの私ではとてもだめなので、もっともっと精神レベルを高めなくてはいけないと反省しています。

超小型円盤が室内に出現！

透視といえばキッチンルームが見えたのが初めてでしたが、その数日後に、数学の問題用紙のようなものが何枚も重ねて置いてある光景が手にとるようにはっきりと見えました。これもテレビの画面を見るように鮮明でした。図形が描かれていたので、図形の問題のように感じたんです。それは高校入試のちょっと前の頃で、私は数学が苦手ですから、もしかしたらこれは入試の問題ではないかしらと黙って見ていたんですよね。でも入試では図形の問題は出ませんでした。

それからまた数日後ですが、今度はアダムスキー型の円盤が目の前に現れたんです。私は自宅では二段ベッドの上に寝ています。下には双子の妹が寝るんです。そして目の前には窓があるんですが、夜

中にその窓のあたりをなにげなく見ていましたら、その窓から突然小さな円盤がポカッと現れたんです。これは影像ではなくて、模型のような立体的な物体で、それが部屋の中を飛んでいるんです。

私はあっけにとられて、「何だ、これは！」と思いながら見ていました。直径二十センチぐらいのミニ円盤で、これが下に寝ていた妹のフトンのあたりまで行きましたから幻覚や透視ではなかったと思います。これは高校入試の直後の頃で、その頃はまだアダムスキーの名前も知らないときですから、ただ不思議に感じただけですが、いま思えばあれは母船から発射された超小型円盤ではないかという気がします。

こんな不思議な物を見た体験は他にも沢山あるんですが、だれに話しても信じてもらえないので、自分でただ一人考え込んだり悩んだりして、多くの体験は忘れてしまいました。いまお話ししているのはそのうちの覚えている部分だけです。

インディアンと円盤を見る

また透視ですけれども、あるとき人の顔が見えたことがあるんです。それはたしか女の人だったと思います。インディアンみたいに見えました。

するとその後方でアダムスキー型円盤がゆっくり降りてきたんです。この話は妹にも話してありまして、「そういえばあのときお姉ちゃんはインディアンみたいに髪をお下げにした女の人を見たと言っていたね」と語っていましたので、間違いありません。

最近見た夢ですが、私が砂漠みたいな所にいるんです。そして友人と二人で星を見ていたんです。すると円盤が夜空をキラキラと輝きながら飛びまわるんですが、友人は何も見えないと言います。これは昔インディアンが住んでいたというあのデザートセンターと関連があるのではないかと思っていますが、どうでしょうか。（注＝デザートセンターはアメリカ西部のモハービ砂漠の一角。一九五二年十一月二十日にジョージ・アダムスキーが金星人と会見した場所）

母船内の機械室？

今度は夢ではなくて透視です。今年の春頃でしたが、目の前にまたテレビの画面のようにある景色が見えたんです。それはすごく複雑な機械装置のある部屋で、沢山のコードがからまったり、ボタン類が並んでいて、コンピューターみたいなものがいっぱい並べてある大きな部屋でした。その光景はまるで私が歩いているかのように次々と流れてゆくんです。

そうしたら数日後にまた全く同じ光景が見えました。その部屋には大きな窓があって、そのガラス越しに見ている感じで、「あ、あそこにすごい機械がある！」という状態で見えました。これは夢ではなくて覚醒時の透視です。

今年の春から夏にかけて、ときどきアダムスキー型の円盤がテレビ画面を見るように目の前に見えるんです。大抵は夜間フトンの中に入って暗い室内なのですが、目をあけても閉じても見えました。私が下から上を見上げているような感じで、円盤の下部の球型着陸装置がはっきりと見えるんです。それが目の前にせまって来て、頭上を通過するように見えます。

アダムスキー型円盤が数機、頭上にゆらゆら揺れている光景も何回か見えました。これは不思議な現象です。なぜって私は本物の円盤のそばへ寄って仔細に見たことはないのに、それが室内で鮮明に見えるんですから——。夢とかじゃなしに本当に目の前に映像が流れるように見えるんですよ。

六～七月頃から大変化が起こる

今年の七月の末頃ですが、その頃は体調がうんと変わってきて、ほとんど食物が食べたくなくなったんです。そして睡眠時間も極端に減って眠れないんです。なにか六月頃から、だれからか呼びかけがあったような気がするんです。しかも睡眠時間を沢山とったときよりも頭がすごく冴えてきました。そして病的なものではなく、頭の中が爽快で、ドキドキして、気分が高揚し、体が軽くなったんです。道を歩いていても体がふわふわして雲の上を歩いているような感じです。人の声が遠くで聞こえたり、自分の声が他人の声のように聞こえて変な感じがします。これは六月から七月末にかけて起こった高揚感でして、言葉では表現できません。

そしてなぜか嬉しくて嬉しくて、夜フトンの中に入っても一人でニコニコ笑っていました。そして例のゴールドの粒がキラキラ輝きながら目の前を飛びますので、あまりにきれいな光景にうっとりして寝ていられないんです。光の粒があまりにも美しいので、まるで〝友達〟が見えるという感じでした。光の粒がもう友達になったんです。

壮麗きわまりない光の輪

そういう高揚感のあった七月のなかばに見えた覚醒時の映像ですが、今度見えたのは光です。そのとき私はフトンの中にいて普通に目覚めていました。すると突然、心臓の中に何かが飛び込んで来たかのようにすごい衝撃を感じて、動けなくなり、息もできないほどでしたが、苦しくはないんです。

そして自分がどんどんその光の中に吸い込まれてゆくような感じがして、いま死ぬんじゃないかと思ったんです。心臓部がしびれて動くことができず、しかも次第に全身にしびれが広がってゆきます。

でも「これが神様のおきめになったことなら私は何も抵抗はしないから好きなようにして下さい」と心の中で思いました。そうしたら、その状態から解かれて、すぐに光が見えました。それもテレビ画面を見るような調子です。

その中心の光体からアニメーションみたいに光の輪が次々と湧き起こって周囲に広がるんです。それは素晴らしい光景で、たいへん高貴な感じでした。そして

その湧き起こる輪をとり囲むように、三つか四つの光体が浮かんで、フラッシュのきらめきみたいにときどき光るんです。下方は海みたいな光景で、岸辺に岩のようなものが見えました。

この光景がいままでに見たもののなかで特別に意味があるような気がします。この映像が消えてから高揚感のピークに達したような気分になって、夜は全然眠くないし、食べなくてもお腹はすかないし、日中仕事をしていても体が浮いてふわふわしているような感じが続きました。

だいいち他人を非難するような気持が全く起こりませんし、怒りや憎しみの心なども全然起こりません。怒りというのは理解がないための過ちですから、「この人は自分が何をやっているのかわからないのだ」と思って許すような気持が先に出てくるんです。とにかくこの映像を見てから自分がすごく変化したと思います。

感情もたかぶりませんし、泣いたり怒ったり笑ったりして騒ぐことも全く消えてしまいました。悪く言えば無味乾燥な人間になったといえるでしょうが、良い意味で言えば他人にたいする理解が高まったように思います。めったなことで驚きませんし、他の人たちが泣いたりして騒いでいても、「なんでこんなことで騒ぐんだろうか」と思って、高い所から見下ろしているような気持です。つまり他人を非難するのではなくて、冷静になったような感じです。しかも、べつだん楽しい事があったわけではないのに毎日が楽しくて楽しくて仕方がないんです。一人でいるときもニコニコ笑っていますし、歩いているときも嬉しいし、花を見ると可愛くて嬉しいんです。

だから怒っている人を見ると信じられません。「怒るって、どういうことなんですか?」と聞きたくなるぐらいです。

花が応答して動く

十一月二十一日はGAP秋田支部の月例会だったのですが、その前日の二十日のことです。職場に花が生けてあったんです。それで『生命の科学』の花の応答のことを思い出して、遊ぶ気持で試してみました。

そのとき沢山の花が花瓶に生けてありましたが、言葉は口に出しませんでしたけれど、「動いて下さい」という感じで呼びかけてみましたら、一個だけ花が動いたんです。それで風が窓から入ってそのために揺れたのではないかと思って窓をしめて、花瓶から離れて、また呼びかけましたら、やはりその花だけが動くんです。何度やってもその一個の花だけが前かがみになるような姿勢になるんです。「とまりなさい」と呼びかけると、動くのをやめるんです。それでたいへん嬉しくなりました。その花は百本菊でした。

実はその前に練習のつもりでバラの花を一本買って試したことがあるんです。でも全然動かなくて、それどころか次の日に枯れてしまいました。バラの花がそんなにすぐ枯れるはずはありませんから、私の悪い想念を吸いとってしまったのかと思って悲しくなりました。

家にはアロエの鉢があります。私はときどきそれを食べますので、もうアロエとは友達というか一心同体なんですが、それにも試しにやってみたんです。

それには花の部分がありまして、やはり呼びかけると動いてくれるんです。いつもというわけではないんですが、辛抱強くやっていますと動いてくれます。

でも家族の人たちに「花が動いた」と言っても全然感動してくれないんです。人間は自分に興味のないことはとりあってくれないものなんですね。だから私がいろんな映像が見えるといっても全然相手にしてくれないんです。家の人は——。

先生はそんなに感動なさっていらっしゃるんですか。とても嬉しく思います。こんなことは他人に話しても笑われるか相手にされないだけでしたから、もう人には話さないことにしようと思っていました。

今年の九月に日本GAPに入会して、支部の月例会に出席して会員の方々に話すようになりました。でもそのときまでは私が見る映像が透視というものか何なのかわからなかったんです。それで九月からアダムスキーの『生命の科学』とか『テレパシー』などを読み始めて、もしかしたらこれは透視という現象なのかもしれないと考えるようになりました。

ブラザーズからの祝福?

覚醒時に見えた映像の話にもどりましょう。今年の八月のことです。アダムスキーが金星人から受け取ったネガフィルムに奇妙な文字と図形が写っていましたね。それと同じものが目の前に見えてきたんです。それがとまってなくて、踊ってるみたいにカチャカチャと動きまわるんです。消えたり現れたりして——。図形もパッと浮かんできました。あのネガフィルムに写っていたのと同じだと思いながら黙って見ていたんです。

そしたら動いているうちに一瞬それらの文字が縦に並びました。日本語の文章みたいに——。でも意味はわかりません。

そして一カ月ほどたってから、また同じものが見えました。ただし二回目のときは図形は見えなくて文字だけでした。でも二回目のときはすごく特殊な感じがしたんです。

それは早朝の四時二十分頃でしたが、目覚めたときに、突然、胸に湯をそそがれたように胸が熱くなったんです。すると例の金星文字が現れてきました。だから、だれかから見せられているような感じでした。

胸が熱くなるという現象はもう一度ありました。十月の初め頃でしたが、自分の部屋にいて普通の状態でいるときに、突然なにか胸が熱くなったんです。優しいフィーリングというか、そんなものがだれかからそそがれているように感じました。なにか祝福されているような感じで、相手がわからなかったんですが、とにかく心から感謝しました。

先生の東京月例会のテープで、皆さん方にブラザーズからの祝福の想念が送られているはずだと言っておられましたね。それに気づいている人や気づいていない人などいろいろあると思いますけど、た

ぶんその想念だったんじゃないかと私はそのときに思いました。

意識による旅行

『生命の科学』を読んでからいろいろな印象が強くくるようになりましたが、これは説明のしようがないんです。聞こえるような感じがするけど言葉でもないし、印象というのはなんとも言いようがないんです。本当に〝声なき声〟という感じです。

最近の印象としては次のようなのがありました。これは私にたいして与えられた言葉です。

「あなたの行うことは保護され援助されていますから、安心して行きなさい」

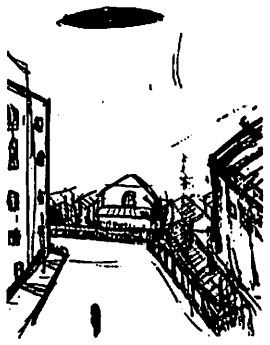
なんだか自分に都合のよいような印象で恐縮ですけど、これも声なき声です。すごく勇気づけられた言葉です。「行きなさい」というのは「どこへ」ということではなく、「生活してゆきなさい」というような意味だと思います。よく考えればスペース・ブラザーズが見守って下さっているという感じがします。

でも実際には私なんて程度の低い人間ですから、そうだとしたら感謝に耐えません。

夢といってしまえばそれまでですが、私が見た夢の中でブラザーズが出現したことがあります。今年の九月二十八日のことで、これも四時二十分です。どういうわけか印象が来るときは早朝の四時二十分が多いんです。目覚めた直後は心が澄み切っているせいでしょうか。

そのときはフトンの中で目が覚めていました。すると突然、金縛りみたいになって、目は覚めていたんですが気を失ったような状態になりました。その間の記憶がないんですが、気がついたら私が家の外に立っているんです。

そしたら上空に母船がいました。私は寝巻きのまま家（アパート）の前に立っていました。そして印象がきて、私の使命みたいなことが言われたようですが、言葉はよく覚えていません。それを聞いたあとで、玄関にカギがかかっていたのに私はそのままスッと中へ入りました。これは夢だったのでしょうか。でも夢という感じではなくて、私が現実に早朝の冷たい空気の中に立っているという感じでした。まわりにはだれもいなくて、上空を見たら母船が浮かんでいたんです。



▲意識による旅行で本人が見て描いた光景

え？　〝意識による旅行〟とおっしゃるんですか？　ああ、そうそう、『生命の科学』の中にそのことが書いてありましたね。きっとそうでしょう。そして玄関の戸を透り抜けてまたフトンの中へ入ったんです。

そのあと今度は本当の夢なのですが、続けて見た夢の中で玄関の所に立っていたんです。すると二人の白人風の男の方が玄関に入ってきました。二人ともすごく楽しそうにニコニコ笑っているんです。あまり楽しそうだから、私もすごく嬉しくなってきました。

そうしたら相手が私の名を呼ぶんです。「真理子さん」と。「真理子さん、あなたのことは〝上〟で覚えられています」と一人の男性が話しかけました。他の一人はうしろでニコニコしていました。これはスペース・ブラザーズだと夢の中で思いました。

夢でブラザーから反省させられる

スペース・ブラザーズが夢の中に出てきた例がもう一つあります。私が夢の中で妹と一緒にタクシーに乗っていました。そのとき私はなぜか想念が荒れていて、すごくイライラしていたんです。なぜこんなにイライラするんだろうかと、はがゆい思いをするんです。

ところがその運転手さんがブラザーだったことが、どういうわけか私にわかりました。この方は運転しながら私の想念をみな見抜いているんだと思うと、心苦しくなりました。

するとその方がくるりとうしろを振り向いて、「面白いゲームがあるから遊びませんか」とか、「おいしいお菓子があるから食べませんか」などと言って、私に楽しい想念を吹き込んでくるんです。その方は本当に心から楽しそうな想念に満ちているように見えるんです。

そうこうするうちに私はすごく反省してきまして、こんなに荒れた想念を起こしながら宇宙哲学をやっているとは何事かと思っているうちに目が覚めました。これでブラザーズから励まされているという感じを強く受けました。

夢の中に現れたイエス

夢の話が続きますが、高校一年生のときに見た夢です。その頃まで私は聖書を全然読んだことはありませんでした。ところが夢の中にキリストらしい人が現れたんです。そのとき私は「あなたはイエスでしょう？」と尋ねたわけではないんですが、目覚めてからあの方はイエスだったのだということがなぜかわかるんです。

その方は私から五十センチほど離れたすぐ目の前に立っていて、逆光のために顔が暗く、全身が影のようになって細部がよく見えませんが、体の周囲は薄いゴールドの光で覆われており、まばゆいんです。

その方はマタイによる福音書の一節だと思いますが、「おのれの心より内ひかりたる光が……」と続けて発言しましたけれども、あとの言葉が思い出せません。

その数年後に初めて聖書を読むことになったんですが、そのときマタイによる福音書の六―二二～二三が目についてハッとしました。そこには「目は体のあかりである。だからあなたの目が澄んでい

れば全身も明るいだろう。しかしあなたの目が（目付きが）悪ければ全身も暗いだろう。だからもしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さはどんなであろう」と出ていたからです。それで数年前に夢の中であの方がおっしゃったのはこの部分だったのだと気付いたんです。そして私はキリスト教のことなど何も知らないのに、なぜイエス様が現れたんだろうと、すごく不思議に思いました。

◀筆者が夢で見て描いたイエス像

生きることを知らぬ人たち

高校三年生のときの三月六日の夢です。私は見知らぬ学校の教室の机の前にいました。机の上には通信機があって、その機械から声が流れました。

「私が間違ったと思っている人間は、生きること以外の物事に頭を使いすぎて答をむつかしくしているようだ。どうもわからんな」

これを二度くり返して言いました。たしかにほとんどの人間は真理を伴わない事に夢中になりすぎて、人生をいかに生きるべきかという問題の答をむつかしくしています。生きることを知らない人間が多いのだと言えるのでしょうね。

ある非常に不思議な夢

これは最近の夢です。九月十五日頃の夢ですが、ある部屋の中に私を含めて五人の男女がいました。私以外に男三人と女一人です。そこは会議室のような部屋で、だれだかわかりませんが、ある偉大な方が来られるのを待っていました。一同は長椅子に座り、その前には机がありました。

一同は言葉を用いないで話をしていましたが、気持は通じあっていました。そしたら急に眠たくなってきて、夢の中の出来事なんですが、たしかに眠たくてしようがなくて、みなウトウトし始めたんです。

すると突然目の前のドアーが開いて、〝偉大な方〟が入ってこられました。私たちは目を覚まして「あ、しまった。眠っていた」と思い、私は反省したんです。

その方は一同をたしなめて言われました。

「なぜあなた方は目を覚ましていなかったのか。なぜ眠っていたのか？」

その方は部屋から出て行ったので、私たちはふたたびその方が来るのを今度は目を覚ましたままで待っていました。

少ししてから、その方が現れました。私たちはいっせいに起立して敬意を表しましたら、その方は深遠な話をし始めたんです。私は心の中で「あなたの素晴らしいお言葉を聞くことができてとても嬉しいです」と言っていました。まわりの人たちは「この日が来るまで本当に辛かった。苦しかった」と言って涙を流していましたが、私は全然反対な気持で、むしろ「この日のために喜びながら生きてきたのだからなにも泣くことはないじゃないの」と思いながら一人で微笑んで立っていました。

そのとき、同じ部屋の左隅に見知らぬ男の人が立って、私をジッと見つめているのに気づいたんです。年盛の人で、頭髪が薄く、メガネをかけて、白いワイシャツに紺のネクタイと紺のズボンを身につけていました。

やがて私は部屋を出て、家に帰るためにバスに乗ってから、うしろを振り向くと、やはりそのメガネの人がうしろの席に座って私を見つめているんです。

この夢を見てから七日後に私はGAP会員となって、初めて機関誌『宇宙哲学とUFO』を見たんですが、その中に掲載されている写真を見てアッと驚きました。なんと夢の中で私を見つめていた見知らぬ男の人は久保田先生だったのです。先生の写真を見てはっきりわかりました。夢で見た姿と何から何までそっくりでした。

これは本当に不思議な夢で、先生の顔を知っていたはずのない私が、なぜ先に夢の中でその姿を見てしまったのでしょうか。不思議で仕方がありません。たぶん私がGAPに入会するのを先生が待っておられたのか、それとも私が先生を予知したのか、いずれかでしょうね。

『宇宙からの訪問者』（旧版）の最後の『訳者あとがき』の二九四頁に、先生がアメリカのパロマー・ガーデンズで写ってらっしゃる写真が出ているのは早くから見て知っていましたが、あの写真はたいへん不鮮明なので、これが先生の顔だというほどの認識は私にありませんでした。だから機関誌に出ている写真を見るまでは全く顔を知らなかったといってよいでしょう。

その夢を見てから『生命の科学』や『テレパシー』などを読み始めて、テレパシックな体験が急速に強くなってきたんです。そしてこの頃は他人が考えていることがわかるんです。百パーセントとはゆきませんが、他人の想念は大体にわかるようになりました。

私だけが目撃するUFO

今年の七月から八月頃は夜になって星空を見上げる日々が続きました。自室の窓から見るんです。

ある夜、妹と二人で空を見ていたんですが、妹が席をはずしたとき、真上あたりに光体が現れて、合図をするかのように強く点滅し、家の裏の方へ移動しました。そこで家の裏へ行って妹を呼ぶと、妹が来る前に消えてしまうんです。それで私一人で待っていたら、また出現しました。消えるまで双眼鏡で見ていました。

こんな経験は何度かあるんです。なぜかUFOは妹がそばにいると出現しないんです。妹はUFOをとてもこわがりますから、そこらへんに何かの関連がある

のかもしれません。

UFOといえば十六、七歳の頃、初秋のある日、オレンジ色の直径二十五センチぐらいの物体が、地上二メートルほどの高さの空間をふわふわと飛んでいるのを見たことがあります。UFOはもう何度も見ています。

GAP総会会場を透視

いままでに経験した透視は突然に夜中に見えるという状態が多かったのですが、十月に入ってから自分で訓練してみようと思って、目を閉じたりして透視の練習を始めました。いまは大抵見えます。目をつむれば何かが見えるんです。景色や人間や顔とか手とか――。

最初に練習したのが十月十日の日本GAP総会の日です。私は行けなかったものですから、何か光景が見えないかと思って黙って…十分ぐらい目を閉じていました。そしたら、受付らしい机とか椅子とか会場らしいホールに大勢の人が椅子に座って真剣に聞いている光景が見えてきました。これは目をつむっていて見えたのでして、昼間は目をあけると、どういうわけか見えないんです。

あとから総会に出席した方にそのことを話しましたら、「会場の広さはどれぐらいでしたか?」と聞かれたので、「あまり広くはなかったようでした」と答えたら、「そのとおりです。あまり広い会場ではありません。その透視はあたっているのでしょう」ということでした。

奇妙な十字架はスペース・プログラム?

今度はもっと最近の透視の体験です。十一月三日の早朝に突然目が覚めました。時刻は四時十五分頃です。すごく頭が冴えていたんですが、目の前に星の形が見えたんです。これはダビデの星といわれているものです（注＝二個の正三角形が逆方角に重なった図形）。

「あらっ」と思って見ていましたら、それが消えて、次に大きな十字架が一つ現れました。それも消えて、今度はその大きな十字架の所へ集まるかのように小さな十字架が沢山わき出てきたんです。するとそれらも全部消えて、最後に疑問符の「?」が大きく現れました。そしてそれも消えたんです。

見たあとで、この図形がひどく暗示めいた感じがして、一種の謎かけみたいで、「解いてごらん」と呼びかけられているような気がするんです。

その後、意味をいろいろ考えてみましたが、解答らしいものがいく通りも浮かんできて、どれが正しいかはよくわかりません。

ところで、その後のことに話がとびますが、十一月二十六日に何かが見えそうな気がして目を閉じていたんです。そしたらアダムスキー型の円盤が現れて、それがゆっくり下降してきました。深夜の一時五分のことで、目覚めと同時に見えてきたんです。円盤のうしろには母船が横に移動していました。その二つが交差するときに、突然、大きな十字架が現れました。それを見て、すごくドキッとしたんです。というのは十一月三日の十字架の図形と関連があるような気がしたからです。

その十字架を見ていましたら、突然そのまわりを円が囲んでしまいました。するとその十字架は飛び上がって、すごいスピードで上方へ消えてゆきました。円盤と母船は互いにゆっくりと逆方向に動いて消えました。この光景も不思議でしようがないんです。

日中でも目をつむると十字架がよく見えますから、なにか十字架に重要な意味があって、私に知らせようとしているんではないかと思うんです。

特にパッと心に浮かんだのは、これはスペース・プログラムのことを意味しているのではないかということなのです。十一月三日の透視で、大きな十字架に沢山の小さな十字架が寄り集まってきた光景を見たとき、すごく「いとしい!」という感じがしました。仲間が集まってくるみたいな――。だから私は思ったんですが、カルマを持つ人々がいま結集しているというような感じがしました。みんなが何か事をなすために使命をもって集まっているというような感じです。

そのあとに疑問符が出たのは、その人たちが果たしてどのようにやってゆくか、それはまだわからないという意味ではないでしょうか。とにかくこれはスペース・プログラムのことを意味しているのではないかと思うんです。

これから、世の中に何かが起ころうとしているという感じがすごくあるんです。いい事か悪い事かはわかりませんけど――。だからGAPの活動はますます重要になってきたという感じがします。

何も起こらないのなら円盤がそんなに出現はしないでしょうし、北海道でも円盤が現れたということですから、これは何かが起こることを知らせようとしていると思うんです。

（以下次号）

付記

この記事は中川真理子さん（二二歳）と編者との秋田市における長時間の対談の筆記録である。ぼう大な体験の一部分にすぎず、まだあとが続くので期待されたい。

本人はきわめて純真かつ気高い女性で、次元の異なる宇宙的な愛の精神の持主でもあるが、何よりも〝不思議な人物〟の一語に尽きるような印象を与えた。その不可思議な体験のかずかずには一貫して宇宙の法則に関する啓示が宿り、別惑星の偉大な人々との関連が深く、どうみても他の惑星から地球に転生した人としか思えない要素を多分に含んでいる。心霊またはオカルト的な色合はみじんもない。今後彼女がどのような体験を積み、いかなるインフォメーションを伝えるか、大いなる関心をもって理解ある目で見守ってゆきたい。

なお事情により本人の住所・電話番号等に関する問い合わせや本人宛の連絡等はいっさいご遠慮下さるようにお願いしたい。この記事の文責及び本人に関する保護責任は編者にあるので、質問その他は編者によこされたい。

（編者）

■一九五七年七月十五日付でジョージ・アダムスキーは International Get-Acquainted Programという国際的な活動網を創設した。以下はアダムスキーが十数カ国の参加グループのリーダーに送った趣意書で、これがア氏から出たニューズレター第一号である。日本GAPはこれより四年後の一九六一年（昭和三十六年）九月にア氏の要請により久保田八郎が創立し、国内向けニューズレターたる本誌第一号を発行した。

この趣意書の原文は昨年十一月に、ア氏の高弟であったアリス・ポマロイ夫人（米マサチューセッツ州ノースボロに在住）より久保田会長宛に送られたもので、GAPの意義を明確に把握することができる貴重な資料である。

「私に手紙を出すことに関心をおもちの皆様方に感謝いたします。どの手紙も全く興味深く、私は深く感謝していますので、いただく各手紙にたいして私が個人的にご返事を出すことができればよいのにと、そればかり考えています。しかしいま世界各地からぼう大な手紙が来ますので、多数の事務職員をかかえていない限り不可能です。私にはそれがありません。

このためにブラザーズ（アダムスキーとコンタクトしていた友好的な異星人）は、地球でゲット・アクェインテッド・プログラムを始めてはどうかと提案しました。これは私の体験について関心のある誠実な男女を各国から一人ずつ選び、その人たちの援助をお願いしようというもので、更にこのリーダーの方々は自国の多くの人々の協力を必要とすることになります。

宇宙から来る訪問者たちに関心のあることをすでに表明された各国の人々は、この活動により互いに知り合いになります。この人たちは同じように関心のある他の人を知らないために、考え方で孤立感を起こすかもしれません。したがってこのGAP活動はこうした人々の心を強化するのに役立つでしょう。辺ぴな地域に住む人々は文通により志を同じくする他の人たちと知り合いになります。

お互いのより大きな理解を求めて、研究や親密な友情を確立するために、このような友人たちによる定期的な会合を開くことが望まれます。私がときどき会っている別な惑星のブラザーズに関する情報は、各国GAPのリーダーに定期的に送られますので、かわってリーダーが自国のグループの助手たちにそれを伝えて、次に助手たちがグループのメンバーたちに伝えます。

このアイデアは、各国の市民が努力を通じて、いかなる偏見や差別なしに同胞との緊密な友情を高めようということにあります。この国民的努力はやがて世界的な理解と友情にまで広がるでしょう。

また個人的に各自が自分の理解を高めるために個人的研究と努力を行い、自分の存在の目的、同胞との関係、人間がすべて一員をなしている宇宙における自分の位置などを理解するようにとの提案も毎月出されるはずです。こんなふうにすれば、向上しようとする欲求を有し、努力しようとする人はすべて心の平安、幸福、肉体の健康などが得られるでしょう。詳細は各国GAPリーダーが伝えてくれます。

私たちすべてのリーダーであるスペース・ブラザーズは、いま地球の良き生活をまじめに望む人たちの充分な協力を望んでいます。これは各個人の一体化した努力を通じてのみ達成できるのです。

多くの祝福と心からの友情をもって。

ジョージ・アダムスキー」

■右のゲット・アクェインテッド・プログラム（略称はGAP（ジーエーピー））運動をもう少し具体的に解説すると、アダムスキーが宇宙的な体験記を発表して以来、あまりにもぼう大な手紙が世界中から殺到したために個別に返事が出せなくなった彼は、ブラザーズの提案により世界的な連絡網を確立した。まずアダムスキーが各国のGAPリーダーに最新の情報を送ると、（当時はコピー機がない時代なので、実際にはカーボン紙で複写した手紙であった）、それを各リーダーが自国語に翻訳して国内向け機関誌に掲載し、これを自国内の関心ある会員に送る、という仕組みになっていた。これにより国内の会員たちはア氏からの最新情報に接することもできるし、会員同士が文通や会合等で知り合いになり、互いに激励し合うということにもなる。要するに情報を知らせ合いながら知り合いになるという活動だ。

アダムスキー存命中の最盛時には十数カ国にGAPグループがあったけれども、彼が亡き後はしだいに減少し、現在GAPの名のもとに活動を続行しているのは日本GAPとデンマークGAPのみ。アメリカのアダムスキー財団はなぜかGAPという名称を使用しない。このうち組織で名実共に世界最大のアダムスキー研究グループは日本GAPである。

■日本GAPは現在会員数約一千名（最盛時には二千名いた）、地方支部は十五支部あり、いずれも毎月、月例研究会を開催し、UFO問題と宇宙哲学の研究実践に専念している。毎年秋に東京で総会を開催し、講演や映画、大夕食会等で楽しい有意義な一日をすごす。各地方支部も年次大会を開き、会長や会員の講演、海外研修旅行記録映画上映、質疑応答等を行い、夕方はパーティーを設けて親睦を図っている。機関誌『宇宙哲学とUFO』は年四回発行季刊誌で、少部数ながら全国の主要書店にも出ている。日本GAPはUFO研究のみならず宇宙哲学の実践グループでもある。

毎年夏には海外研修旅行を実施し国際的視野の拡張を図っている。第一回目は「アメリカ中米宇宙考古学の旅」続いて「アメリカ南米宇宙考古学の旅」「アメリカ・メキシコ・カリブ海宇宙考古学の旅」「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」を行い多大の成果をあげた。本年夏は「エルサレム宇宙考古学の旅」を実施する予定（本号38～39頁を参照）。

全集発行計画が具体化！

著書

アダムスキーの著書としては次のものがある。

1、宇宙からの訪問者（現在絶版）

これは彼の宇宙的な体験を述べた有名な Flying Saucers Have Landed（空飛ぶ円盤は着陸した）の中の本人の体験を述べた第一部と、これの続編である Inside the Space Ships（宇宙船の内部）全体とを一冊にまとめた日本語改訳版で、これにはアダムスキーが一九五二年十一月二十日に米カリフォルニア州デザートセンターで着陸した金星人と会見したときの実録から、その後、円盤や母船に乗り、想像を絶する発達をとげた他の惑星の人々とコンタクトしたり、月や金星などの詳細を知らされたり、宇宙的な生き方をするための法則（哲学）を伝えられたりする模様が克明に述べられている驚異的な書物で、アダムスキーの著書の中心をなす最重要なもの。アダムスキー問題（というよりも地球外文明）に関心をもつ人はまずこれを読む必要がある。

2、空飛ぶ円盤の真相（現在絶版）

Flying Saucers Farewell の日本語版。①の補遺的なUFO異星人問題の真相、世界講演旅行記、それに、『悪魔すなわち時の人』の三部から成る。現在、原題どおり『さらば空飛ぶ円盤』の題で本誌に改訳決定版を連載中。

3、宇宙哲学（たま出版）

アダムスキーの宇宙的哲学の著作三点の内、中心的書物。原題は Cosmic Philosophy

4、テレパシー（文久書林）

人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説いたもので、特に目・耳・鼻・口の四官をコントロールして、内部の〝意識〟から来る印象を感受する方法を詳述。類書の全く存在しない稀覯本。

5、生命の科学（文久書林）

アダムスキーが他界する数年前に出した講座 Science of Life Course という十二分冊の講座を邦訳して一書にまとめたもの。アダムスキーの宇宙的哲学の総まとめ的な一大金字塔で、宇宙の意識と人間の心との一体化法や、真実のテレパシーと人体細胞から来る印象との相違、特に心霊的な通信現象の発生する理由とそれにたいする警告等が詳述してある。これも他に類書のない、宇宙的な覚醒を与える素晴らしい人間開発指導書である。

6、空飛ぶ円盤とアダムスキー（絶版）

アダムスキーが存命中に日本GAP主宰者・久保田八郎に送り続けたぼう大な情報と書簡類を編さんしたもの。副題は『死と空間を超えて』。特にアダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を克明に述べた『金星旅行記』と『土星旅行記』が圧巻。

かつて地球でアダムスキー夫人であり、死後金星に転生して少女となったメリーとの劇的な会見と、少女が語る深遠な宇宙の法則は驚異的な内容。

以上各日本語版の訳者はすべて久保田八郎。アダムスキーの原書の日本語版翻訳出版権はアダムスキー財団より久保田八郎のみに与えられている。

右の六点の著書は今年二月より文久書林からジョージ・アダムスキー全集として順次出版する計画があり、第一弾として『宇宙からの訪問者』を二月末に刊行の予定。『生命の科学』と『テレパシー』は全面的に改訳し、本誌に連載した上で全集に加える計画。

右の六点以外に、本誌に掲載したアダムスキーの論説や講演録等も網羅編さんして全集に組み入れられるはずである。

以上の他にアダムスキーが書いた最後のまぼろしの著書がある。これは事情により出版されず、陽の目を見なかった。編者は某所でこの英文原稿を読んだことがあるけれども、内容的には『宇宙からの訪問者』がはるかに上位にあることがわかった。地球外惑星の文明を知るには『宇宙からの訪問者』だけで充分である。これを熟読含味するだけでも読者は言いしれぬ精神の高揚感を覚えるだろう。そのときこそマインド（心）と宇宙の意識との一体化が発生したのであり、本人の人体を生かす意識とマインドが融合したのである。この体験記と哲学関係の書とを交互に読み返されたい。

アダムスキーの宇宙的な体験記は世界のUFO研究界に大きなショックを与えた。信ずる信じないは別としてUFOに関心のある人は必ず目を通すといわれるほどに名高い。いまも賛否両論に分かれているけれども、否定的傾向が強くなってきた。これは米ソ両国が打ち上げる惑星探査機による調査の結果、太陽系内の地球以外の惑星には人間は存在し得ないことが〝判明した〟という結果になったからである。

しかし私たちはアダムスキーの体験記の内容は事実そのものであったとみている。理由はいろいろあるが、久保田八郎が五度渡米して関係方面を徹底的に調査した結果、驚くべき情報を入手したことや、アダムスキー型円盤といわれるUFOが依然として世界各地に出現すること、編者やその他の方々のある個人的な体験などにかんがみて一般社会の裏面で驚異的な出来事が展開していると考えられることなどによる。要するに米ソ両大国はある宇宙的な事実を隠しているにすぎない。これはパニックの発生を警戒しているためと思われる。

アダムスキーの宇宙的体験記は驚倒すべき事実を伝えた今世紀最大の書物の一つであると編者らはみなしているが、時代を先取りしすぎたために不利な立場におちいった感もある。しかしこのような例はジョルダノ・ブルーノ、ガリレイ、パストゥール、マルコーニその他偉大な先覚者にもみられることで、地球では現代に至るまで日常茶飯的な事象である。この世界はこんなものなのだろう。

10 聖書とUFO 2

連載第8回 さらば空飛ぶ円盤

「空飛ぶ円盤の真相」改題・改訳

ジョージ・アダムスキー
久保田八郎訳

太古は超長寿だった

さて、ここで『宇宙からの訪問者』の第二部『宇宙船の内部』で金星人オーソンが次のように言っている点をもっと明らかにすることにしよう。

「地球の聖書に記されたある記録について、あなたの関心をうながしたいと思います。その文章を注意深く研究されますと、地球人の寿命は、上空を覆っていた雲が減ってきて、人間が初めて宇宙の星を見たときに短くなり始めたという箇所を発見されるはずです」

これは現在我々が大空と呼んでいるもののことを言っているのである。ここで私は彼の言葉によって彼ら異星人が我々よりも聖書をよく知っているという証拠になることを確証しよう。

『創世記』9・29はノアが九百五十歳まで生きたと記している。人間が星を見たことに関する聖書中の最初の説明は、『創世記』15・5にアブラム（アブラハム）が天を仰いで星を数えるようにと命じられる箇所である。たえまなく覆っていた雲が地球をいつ去ったのかはよくわからない。しかしこの雲の中に含まれた水分がノアの洪水のあいだに雨となって落ちたことを知っている。その洪水の後、空は次第に澄んできて、ノアとアブラハムの時代のあいだのある時期に星々が初めて見られた。そして雲の覆いが消滅したときに恐ろしい宇宙線が地上に降りそそぎ、人類の寿命は急速に縮まったのである。アブラハムは百七十五歳で死んだ（『創世記』25・7～8）。

ノアからアブラハムまでの系図をたどってみると、我々は十一代の世代を見い出す。この世代のあいだに人間の寿命はノアの九百五十歳からアブラハムの百七十五歳に落ちたのだ。そしてそれ以来、六十五歳という平均寿命になってしまった。

スペース・ピープル（異星人）がこの時代のことを思い出したり、『宇宙からの訪問者』に述べてあるように、現在起こっている物事やその理由などを我々に語ることができるというのは驚くべきことである。私の右の書は現代に実際に起こっている出来事を詳細に伝えたものである。

聖書は大気圏外の様子を伝えたもの

聖書の研究家である一文通者が私に次のようなインフォメーションを送ってくれた。これは一般の人にとって何かの役に立つかもしれない。しかし私は個人的にこの件を調べたわけではない。

「例の車輪に関する予言的な描写は紀元前五九五年になされました。その後、黙示者のヨハネは紀元九六年に〝生きもの〟についてもっと詳細に書くようにと、どうやら霊感を受けたようです。〝爆発の力〟の現象については（見たところこれは宇宙のまたは核エネルギーの形で表現されているようですが）、この記事は紀元前約一四九一年から七一二年にかけて記録されたものです」

このような説明は聖書の全体を通じて見い出される。

現代において我々は、この世界の宗教的な指導者層がきわめてまじめに注意を払わねばならない生命の一段階を通過しつつある。我々はこれらの指導者によってイエスが地球人と同様に肉体や血液を持って生まれたと教えられてきた。またイエスはその肉体を天に持って行ったとも教えられている（当時、空は常に天と称されていたので、これは空の意味である）。

数年前、ローマ・カトリックがイエスの母マリアも同様にして連れて行かれたと声明したことを我々は聞いている。多数の教会はエリヤとエノクも生きたままで天空へ運ばれたと教えている。この人たちは生きたままでどこか他の惑星へ行ったのであり、そこでたしかに安楽に暮らしたのである。

以上の事柄でわかるのは、我々も異星人と同様に宇宙船を持てば彼らの惑星へ旅行できて、そこで生き続けることができるかもしれないということだ。我々は宗教的な思想でこのことを教えられてきた。我々はイエスによる「多くの住まい」という言葉を支持しているし（注＝これは人間の住める多くの惑星の意）、また「みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように」という祈りの言葉も我々はもっている。〝天空〟からだれかが降りて来て我々に教えてくれない限り、右の言葉にどうして従うことができるだろう。こんなことはみな我々に予言されてきたし、空中に奇妙な出来事が発生するであろうことも知らされてきたのだ。しかもその出来事は実現しているではないか。

UFOの出現は予言されていた

聖職者たちは何をしようとしているのだろう。彼らはずっと我々に童話を教えてきたと言うつもりなのだろうか。それとも右の事柄は現代においても真実であり、彼らがずっと教えてきたことも真実で、今日我々はその真実の現象を見ているのだということを彼らは認めるつもりなのだろうか。彼らがこのことを考えているか否かはきわめて重要である。聖書は古代のこのような現象を多数あげているからだ。

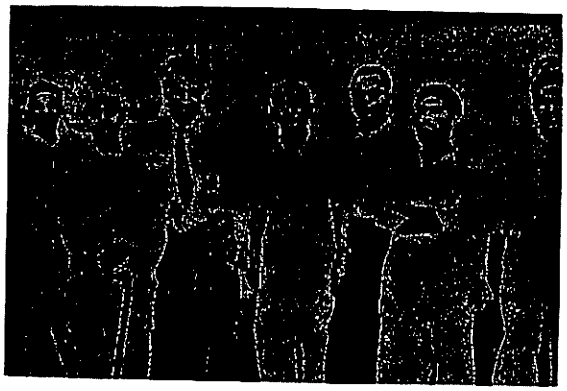
もしこのことが起こるならば、空飛ぶ円盤として知られるあの宇宙船は我々の教訓を支持し、聖書の記録を支持していることを意味することになる。もし我々が聖書や聖職者の教えを真実として認めるとすれば、今はそれを実証すべき時代である。空飛ぶ円盤の出現は予言を成就しつつあるのだ。しかも我々が認めねばならないのは——我々自身をバカにしても始まらないが——今の若い世代は古い世代のようには教会へ行こうとしないという事実である。現在は各国が大気圏外へ打ち出す人工衛星の建造に懸命になっているために特にそうである。私が感じるところでは、比較的短期間内に地球人は地球製の宇宙船に乗って別な惑星へ宇宙旅行をするだろう。

地球人が宇宙へ向かって遠く旅をするたびに、宇宙的な精神を持つこの若者たちは——そのような若者は無数にいるのだが——大気圏外のこの開発が、彼らが精神面で受けてきた教えとあまりにくい違うことに気づくだろう。現代の精神的な指導者が人類の進歩を宇宙空間と融合させない限り、一九七〇年までに彼らの教会はからっぽになり、仕事を失うことになるだろう。現代の若者たちは事実や現実を見てそれに従うだろう。彼らは今まさにそうなろうとしているのだ。

我々はそのような時代に生きている。「わたしたちの戦いは肉体に対するものではなく、この世のもろもろの支配、権力、闇の統治者、高い位置にある精神的な邪悪に対する戦いである」（『エペソ人への手紙』6・12）

これを現代の世の中にあてはめるとよい。人間は何を持っているというのか。我々は実際に発生しつつあることや、予言類が実際に実現しつつあるかどうかを知ることはできる。しかしこのためにいかなる恐怖をも起こしてはならない。これは理解、すなわちいま存在している物事をありのままに認めることによって受け入れられねばならない。

聖書には後の時代に人間が恐怖のために心臓をマヒさせるだろうと述べてある（『ルカによる福音書』21・26）。私は説教という意味での説教者になりたくはないが、真実を無視することはできない。現在、世界中の人々が心臓病で死んでいる様子を注目する必要がある。まさに予言で示すとおりだ。なぜか？　地球上で世界の諸国民が悩み苦しんでいるからだ。我々は海と波がとどろくのを見る（『ルカによる福音書』21・25）。我々はかつてないほどの地震や津波に襲われている。



◀写真は一九五九年四月十七日、アダムスキーが世界講演旅行で立ち寄ったインド・カルカッタのダムダム空港にて。前列左より三人目がアダムスキー。その左がインドGAPリーダーS・K・マイトラ博士（バナラス・ヒンドゥー大学教授）。このとき空港に数百人の群集が歓声をあげてアダムスキーを出迎えた。マイトラ博士と久保田八郎は多年文通したけれども、高貴な博士は他界されてインドGAPは解散した。博士は金星に帰転生したといわれている。

従来なら二年半で起こる大地震が十四週間で発生している。目覚めようではないか。もっと自我を謙虚にしよう。そうすれば我々は発生しつつある物事をはっきりと知ることになるだろう。

異星人は地球人を救いに来ている

円盤は人々を傷つけたりおびやかしたりするために来ているのではない。円盤の飛来目的を理解していない人々から非難されてきたけれども、円盤はだれをも傷つけたことはない。地球の航空機にたいして敵対行為に出たりその乗員をさらったりしたこともなかった。エリヤがそうであったように、連れて行かれて、後になってから、知っていることを教えるために帰って来た人もいるかもしれない。たぶんこの例はまだ起こるだろう。そして蒸発した人はそのようなメッセージをたずさえて帰って来るだろう。ただしその人たちを精神病院に投げ込んだりしなければだ。

我々は罪人ということになるのだろうか。ルッペルト大尉の著書は地球の軍隊が円盤を攻撃したことを認めている。もしこの円盤なるものが空軍が主張しているとおりのものであるとするならば、なぜ撃つのだろう。円盤が惑星間航行用の宇宙船であるとすれば、なぜ撃つのか？後者の場合、宇宙を航行できるほどのすごい技術を持つ人ならば、当然撃ち返すことはできるだろう。

しかし撃ち返していないという事実は、この訪問者たちが友好的であって、地球を征服する欲望を持たないことを決定的に証拠づけるものである。もし異星人が我々を征服しようとしたなら、我々は全く自分で防ぐことはできなかったであろう。我々は彼らの科学的能力を絶対に凌

駕(が)することはできないだろう。そして最も確かなことは、我々はいかなる最高のロケット類や航空機をもってしても円盤に追いつくことはできないのである。

彼らは地球人にたいしてどんな敵意をも示したことはなかった。空（天）から来るものは何でも常に天使、神または主とみなされてきたのなら、我々は天使や神を撃っていることになるではないか。このことは、最後の時代において地球の諸国民にとって必要なときに地球人を援助するためにやって来る天使たちにたいして地球人は抵抗するであろうという聖書の予言を実現させることにならないだろうか。忘れてならないのは、天使はいつも普通の人間として描かれていたという点である。聖書のどこにも天使は翼を持っているとは言っていない。『創世記』18・2には、アブラハムに現れた三人の天使が全く人間のように見えると述べてある。聖書中の多数の箇所で、人々と一緒に道を歩いた天使たちが人々の食物を・緒に食べたり家に泊まったりして、あとで自分たちが地球の人間ではなくて天使であることを洩らしたことが出ている（『ヘブル人への手紙』13・2。『ルカによる福音書』16・5など）。

他の惑星の人々が古代において地球へ派遣されていたというのに、現代は派遣されていないとだれが言えるだろう。人類が苦難におちいるたびごとに彼らは出現して、それを切り抜ける方法を教えるらしいのだ。人類がそれを聞きいれるならば大抵は最少の努力で苦難をのがれるのであるが、その忠告を無視すれば人間は稼いで得たものだけを受けとるのである。今日ほどに世界が大きな苦難に直面しているときはないだろう。

多数の人がスペース・ピープルはクリスチャンなのかどうかを知りたがっている。私ならば彼らは地球人以上にすぐれたクリスチャンだと言いたい（訳注＝これはキリスト教徒という意味ではなく、宇宙の法則を生かしている人の意）。地球人はイエスの教えを信じたのではなく、ただそれを復誦していただけのことなのだ。地球人は人々の前で〝クリスチャン〟というレッテルとイエスの名とを飾っておくためにそうしてきたのである。ただそれだけのことなのだ。人間は信ずることは何でもそのとおりに生きているが、キリストの教えを生かしてはこなかったのである。

我々がキリストの教えを生かしてきたならば、苦痛、悲哀、または今日さしせまっている滅亡の脅威などはなかったであろう。イエスの教えが我々の日常生活に応用されたならば、以上の状態は存在しなかったであろう。地上に事実上の天国が出現していたであろう。

ときおり我々は日曜、クリスマス、復活祭などの日にキリストの教えを復誦する。それから外へ出て、次に思い出させられるまではすっかり忘れてしまうのである。その教えを生かすほどに把握していないのだ。ここでふたたび宇宙の使者たちが我々に警告している例をあげよう。

『宇宙からの訪問者』で述べたことだが、「もし地球人があなたがたを撃ったり、撃ち落とせる射程距離内に近づいたりしたら、あなたがたは自分の持つ力で自衛しますか」と私がその〝男たち〟に（異星人たちに）尋ねたとき、彼らは答えた。

「いいえ、私たちは死ななければならないでしょう。理解をしていない兄弟を利用することはできないからです」

イエスも十字架にかけられたとき同じことを言ったではないか。

「父よ、彼らを許してやって下さい。彼らは自分たちが何をやっているのか知らないからです」

我々なら復讐(ふくしゅう)を頼んだことだろう。

見知らぬ〝旅人〟をもてなそう

次の点を私は特に強調したい。各国政府の要人で、その理解力がどの程度にせよ、宗教的教育を受けていない人や〝至上なるもの（神）〟に敬意を払わない人を私は知らない。ところが、そのような要人たちが地球へやって来る人々を攻撃するということになれば、そんな人はいったい何を考えているのだろう。もしその人々が自分の聖書や宗教教育を正しいと信じているとすれば、地球人を導くために天空から天使たちがやって来ていること、最後の時代にふたたび来ることになっていることなどを当然彼らは知っているはずである。異星人たちが予言を遂行するためにかつて地球を離れたのなら、また地球へやって来なければならないということを彼らは知っているはずだ。

そうなると、結局異星人を撃つことによって神の御手(みて)に挑戦していることにならないだろうか。現在我々を援助するために派遣された使者たちをなぜ殺そうとするのか。我々はクリスチャンであると自称するのならば、我々の救援者になるかもしれない天使たちを撃つのをやめて、キリストの法則（宇宙の法則）に従おうではないか。

ルッペルト大尉は地球人がUFOを攻撃した例（複数）を述べている。彼は多くの例をあげていないけれども、UFOは何度も攻撃されたのだ。ある噂(うわさ)によると、円盤のなかには撃ち落とされたのもあって、地球人の無知のために生命が犠牲にされたということである。

神ご自身の英知に照らして、また名ばかりのクリスチャンとしてではなく真実のクリスチャンに照らして、状況全体を再検討してみようではないか。そうすると我々はげんに生きている時代や、何のために準備しなければならないかということなどを理解するだろう。理解をするときに我々は自分たちにとって役立つことをなし、創造主とその目的のために奉仕することになるのだ。そのときこそ我々は自分を真実のクリスチャンとみなすことができるのである。

異星人たちは真理を知りたがっている人々を援助するために来ているのである。だから彼らを無視しないことにしよう。救われるためにできる限りの事を学ぼうではないか。ただし何らかの救いがなされるとするならばだ。このことはまた、人間性を救うことによってこの真理が宗教を救い、さらに教会をも救うことを意味するのである。

天空から来るあの人々にたいし友好的な感情を促進することによって、我々は彼らを仲間として歓迎し、各家庭は彼らとの対面の栄に浴し得るのである。「ヘブル人への手紙」13・2にも次のように述べてある。

「旅人をもてなすことを忘れてはならない。このようにしてある人々は気づかないで御使いたち（異星人）をもてなした」

多数の人が確かにすでにこのことをやっているし、多くの人は知っていて彼らをもてなした。しかし我々が彼らにたいして正しい態度をもてるようになれば、だれもが彼らをもてなすことができるのだ。

キリストの教えをためらうことはない。その教えを説き、そのとおりに生き、その知識を万人の心に近づけようではないか。地球的な角度からではなく、また教会や宗派的な角度からでもなく、普遍的宇宙的な角度からだ。イエスは言ったではないか。

「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らもわたしの声に聞き従うであろう。そしてついに一つの群れ、ひとりの羊飼いとなるであろう」（「ヨハネ」10・16）

十二使徒も別な惑星から転生してきた

各惑星は間違いなく人類が住むように作られたという確実な証拠が聖書にあげてある。生命は自然の偶然事ではない。

「イザヤ書」45・18に次の箇所がある。

「天を創造された主、すなわち神であって、また地をも作り成し、これを堅くし、いたずらにこれを創造されず、これを人の住み家に作られた主はこう言われる。「わたしは主である。わたしのほかに神はない」」。（訳注＝この部分はある日本語訳聖書の文章を引用したが、英文聖書と対照するとたいへん拙い訳になっている。このような例が日本語訳聖書には多いので注意を要する）

神がこの世界（地球）を人間が住むように作られたとするならば、他の惑星群をも人間が住めるように作られたに違いないと考えるのは合理的である。

この世界の者でない人たちが我々のあいだに混じって住んでいるという私のこれまでの声明を聖書は裏付けている。

「ヨハネによる福音書」17・14に次のような言葉がある。

「わたしは彼らに御言葉を与えましたが、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らも世のものではないからです」

17・16もこの言葉をくり返している。これら各節は使徒たちのことを言っているのであって、地球人のなかに住んでいる異星人のことを意味するのではないと考えている人もあるが、この場合はそうではないことがわかる。なぜなら語り手のイエスは「私が世のものでないように」という言葉に重点をおいているからだ。

以上は、イエスとともに働くという特殊な目的のために、十二使徒も別な惑星から来て地球で生まれかわったことを意味することになる。彼らは前生の体験の記憶を一部分かまたは全部失ったままこの世界に転生する人々の先駆者であったのだろう。

聖書に現れるUFOと天使

母船でさえも聖書中に〝飛んでいる巻物〟と記されている（「ゼカリヤ書」5・1～2）。その時代において葉巻型宇宙船にたとえることのできるありふれた物としては、羊皮紙の巻物ぐらいのものであった。「ゼカリヤ書」6・1には、四両の戦車が二つの山のあいだから出て来たとある。これらは「エレミヤ書」4・13の戦車と同じものではないだろうか。ここでもそれらが雲のようにやって来て、つむじ風のような戦車とワシよりも速い馬を従えていることがわかる。ワシとか雲とかを引用しているのはその戦車が飛んでいたことを示すものである。

ここで聖書のケルビムについて注釈を加えてもよいだろう。前に述べたようにエゼキエルの見た不思議な飛ぶ機械はケルビムであった。これはある聖書学者連によると、ある種の天使であると考えられている。しかしこれは輸送の手段として用いられたもので、数例ではそれが何かの船であることを示している。エゼキエルのケルビムはやはり円盤なのである。

ケルビム（第二階級の天使）の別な例は「サムエル記下」22・11に見い出される。

「彼はケルビムに乗って飛び、風の翼に乗っているのが見られた」

これに似た例は「詩篇」18・10に記録されている。ここではダビデ王が主に助けを求め、主はケルビムに乗って到着する。

「主はケルビムに乗って飛び、風の翼に乗って飛んだ」

その特長ある火の雲は主に付き添っている。

明らかに古代の教会はケルビムとは天使であると信ずるようになったらしい。それが翼に乗って飛ぶと述べられているからだ。古代人は宇宙旅行者の性質について知識を持たず、宇宙船をある種の火を吐く動物だと思っていた。彼らは天空を航行するために作られた機械的な建造物のことなどを考えることはできなかったのである。現代の自動車でさえも古代人にとっては別な種類の天使かケルビム、またはおそらく悪魔として記述されたことだろう。

肩から翼の生えた、長く白い衣服を着た天使の概念が、そんなふうな絵を描いた大画家たちによって現代人の心に吹き込まれたのである。しかし聖書はいつもそれらを他の世界から来た普通の人間として述べてきた。

我々が望むならば我々も宇宙から来る訪問者と同じようになれると確言されている。「詩篇」82・6と「ヨハネによる福音書」10・34の両方に「あなたがたは（人間はすべて）神々である」と記してある。だから我々は堕落した位置から登り返す力を持っているのだ。その宿命の遂行のために力強く努力しようではないか。

（第10章完　以下次号）

●82年度

日本GAP総会報告

斎藤泰文

一九八二年十月十日、東京・皇居北の丸公園内の科学技術館で今年度の日本GAP総会が開かれた。出席者は二百名余。全部会員。

午前十時、篠氏が流暢な口調で開会を宣言し、当日の第一講演者田中義則氏を紹介した。

田中氏の演題は『テレパシーと物理学』で、今日の我々の生活に深く浸透し、我々とはもはや切っても切れない関係にまでなっている時代の花形——コンピューターを扱う仕事にたずさわりながら、感じ、考え、啓示を受けたことを氏の高邁な量子力学の知識をわかりやすく、やさしく加えながら説明した。その中で面白い話があった。電子の動きをいかに詳しく知るかが量子力学の目的であるが、その量子力学をもってしても、どうしても表しきれない電子があるという、いや、電子の動きはまだまだ確率的な〝雲〟のように表わせるだけでしかないのだが、そのような電子のうち、解き方によっては電子の存在が無限に位置することになるものや、一瞬消えてしまう（ゼロになる）ものが出てくるという。つまり電子はゼロと無限を併せもつことになる。氏はこのゼロと無限を共有させ得る媒体となるものに〝テレパシー〟が深くかかわっているのではないか？という。すなわち、電子が時間、空間を越えてどこへでも存在できることが、テレパシーの働きによって量子的に説明できるのではないかと現代最先端の科学へ重要な提言をした。この方面に興味ある人にとっては大きなヒントになったことと思う。

次に氏はガラリと内容をかえて『許す』ということについて、氏なりの見解を経験をふまえて、かんでふくめるように話した。なかでも「失敗は、しようと思ってするのではなく、誰でもよかれと思ってやった結果、ミスになっただけである。ゆえに失敗は他人のものだけでなく自分のものであっても許すべきである」と説いていたことを聞いて、何かえもいわれぬ勇気が湧いてくるような感動をおぼえた。それから、「悔やむ」ことについて鋭いことを言っていた。「……過去のことを悔やんでいるのは他ならぬ現在の自分である」と。私はこの見方を更に発展させると、「……過去を悔やむのが現在の自分なら、未来を夢みるのも現在の自分ということになるから本来は過去も未来も時間的なものは何もなく、全体がただ存在している。そして各細胞は各レベルで活動し、創造主に奉仕している」創造物の姿が見えるような気がした。

次の講演は久保田会長による『アダムスキー問題とUFO』。会長は、このところアダムスキーやUFOに対して一般的に否定的風潮が強まっていることについて、その原因は惑星探査機の発表が大きな原因となっていると話し、一部の学者の偏見が大衆の錯覚を誘っている事実に鋭いメスを入れ、表面的な情報に惑わされぬ確たる信念がいかに重要であるかを説いた。会長はアメリカ政府要人が真相を知りぬいているにもかかわらず公表できない事情を最近の日本の教科書問題を例に説明し、会長自身の最新の体験を背景に、その「確信」を得るには「誠実さ」と「幸せな楽しい想念」がいかに重要かを力説する。真の「誠実さ」とは何ごとも「いいかげんにやらないこと」であり、〝見返り〟を求めずただ相手を喜ばすためだけに「無償の奉仕をつづけること」と説明するのを聞いて、私はこのことはまた「愛」の別の表現だと思った。

それでは、その「誠実さ」を堀り起こすにはどうするか。それにはまず会長は「うつろいやすい『現実』の世界の他にもう一つ『絶対に誠実な、完全な、愛あふれる、無限のパワー、無限のエネルギーに満ちた世界』があることを知る（悟る、認識する）ことで、その絶対の世界すなわち『意識の世界』と我々の四官の世界とが重なっている事実を知り、そこへ移住すれば良い」と説く。これを聞いて私は、現実のカベは厚いが、決して破れぬものではないような気がした。

昼食、休憩をはさみ、午後からは映画史上まれにみる大傑作『十戒』が上映された。イエスよりもっと古いモーゼの時代の史実をもとにしたコンタクトストーリーだが、今なお戦火の絶えない中東が舞台になっているのを見て、二千年経っても三千年を経てもなお成長できない人間の心の未熟さをなんとも歯がゆく感じた。

総会終了後は東京駅構内の「精養軒」で大夕食会が開かれ、余興にたんのうしたあと、しまいにはほとんどの人が音楽にあわせて愉快に踊りだし、素晴らしかった一日を惜しまんばかり。今年は夕食会参加者が百二十名にも達し、明るい雰囲気で、結局二次会へも六十名を越す大団体で押しかける始末。

年ごとに磨かれ、洗練されてゆく日本GAPの姿を象徴する素晴らしい総会であった。久保田会長はじめ参加者の方々には心の底から感謝あるのみ。

またも会場上空にUFOが出現！

毎年GAP総会の日には会場付近上空にUFOが出現するのを何人かの出席者が目撃するならわしになっているが、今度の総会の日もやはり出現したことが判明した。

当日総会の午前の部が終了して昼食休憩の時間に館外の公園に出た会員・清水勝一氏（茨城県勝田市）が、科学技術館と武道館の中間にあったベンチに腰かけて弁当を広げたあと、十二時四十分頃、UFOが出現しそうなフィーリングをおこして空中を観測中、突如、武道館側の上空から仰角四十五度で黒い豆つぶ大の物体が音もなく南側へすべるように飛んでいるのが見えた。付近にいた神奈川支部の人たち数名の内、一名も双眼鏡で確認したという。物体はやがて木立のむこうへかくれて見えなくなった。

1982年度
日本GAP総会
IGAP JAPAN GENERAL ASSEMBLY1982
GAP-JAPAN
日本GAP総会
IGAP JAPAN GENERAL ASSEMBLY1982
THE SCIENCE & COSMIC PHILOSOPHY OF GEORGE ADAMSKI
IGAP-JAPAN GENERAL ASSEMBLY1982
THE SCIENCE & COSMIC PHILOSOPHY OF GEORGE ADAMSKI

●82年度日本GAP総会講演要旨

テレパシーと物理学

田中義則

（前略）

私は日本GAPには宮城県大河原町にいた頃、友人のすすめにより何の抵抗もなくすんなり入会しました。それは大学一年のときですが、それ以来八年になります。ちょうどその頃、GAPの仙台支部も発足し、仙台におりました頃は毎回のように月例会に出席させて頂き、ずいぶんお世話になりました。今年より東京月例会の司会者としてたいへん未熟ではございますが、久保田会長とご一緒に張り切って働かせて頂いております。

GAPで幸福になる

先程も申しましたように私は日本GAPに入会させて頂いてから八年になります。その間いろいろな事がありましたが、残念ながら八年もたつのに自分の進歩があまりにも遅いということに気づきます。ややもすると自分はいったい進歩しているのだろうかと悩むときすらあります。しかし八年間を振り返りますと徐々に変化したと言えると思いますが、やはり確実に変わっている自分に気がつきます。

たとえばその一つに、自然に対する自分の考え方があります。私はいま自然の動植物や鉱物からさえもできるだけ学ぼうとしているつもりです。以前の私は大河原町という片田舎で自然に恵まれた環境の中にいながら自然から学ぼうとしようとは思いませんでした。学校教育を含めて人から学ぶだけで充分であると思っておりました。

しかしそうではありません。自然界はいかにバランスよく秩序だって動いていることでしょうか。自然におけるさまざまの形は、学問でいういわゆる流動率、線型率とか、そんないかなる数学の方程式を解いて出てくる形よりも、合理的で精巧な形をしております。

また自然の美には、たいへん美しいものがあります。しかるにこれをどんなに偉大な美術家やデザイナーをもってしても、残念ながら自然の美の前にはかなわないということが、だんだんわかってきました。

また自然界の動物は決して無益な殺生をいたしません。人間は自分たちの楽しみで無益な殺生をすることがありますが、これはたいへんな悪だと思うようになりました。学校教育ではだれもが自然界の虫には害虫と益虫があると教わってきました。その虫たちのなかで益虫、たとえばトンボがありますが、そのトンボを殺せといわれたら可哀そうで殺せない人も、いわゆる害虫のハエやゴキブリなどなら平気で殺せる方が世の中にはずいぶんいらっしゃいます。もちろんこの会場の中にはそのような方はほとんどおられないと思いますが、よく考えてみますと、害虫、益虫のどちらも小さな生命を持った生きものです。そして宇宙的にみれば全く同じレベルになるわけですが、人間側からは勝手に害虫、益虫と分けてしまったわけです。私は恥ずかしいことにGAPに入会後に初めてこのような考え方を持つに至ったのです。

私はGAPに入会以来、致命的なトラブルやその他の不幸にも会いませんでした。それはやはり入会してからの自分自身の変化のたまものであると思います。とにかく宇宙哲学という哲学は私にとっていま知り得る限りの最高のものです。（注＝アダムスキー著『宇宙哲学』『生命の科学』『テレパシー』を総称して宇宙哲学という）そして私はこの哲学を実践する限り、幸福に向かうことはあっても決して不幸には向かわないだろうと確信しております。皆様方もきっと同じお気持と思います。

コンピューターの驚くべき進歩

前置きが長くなりましたが、これより本題に入らせて頂きます。本日はテーマとして二つ用意いたしました。一つはコンピューターと物理学、もう一つは〝許す〟ということについてです。

先程も申しましたように私は仕事柄、毎日コンピューターと顔を合わせております。それでいやがおうでもコンピューターのことを考えざるを得ないわけです。現在コンピューターはたいへんな進歩をとげております。ここ数十年のあいだに飛躍的な進歩をとげました。私を含めて皆様方の日常生活では、小さなものは卓上計算器、マイコンを使ったおもちゃ、また町にありますゲームセンターにはかずかずのゲームマシンがあり、大きなものになりますと、あまりにも有名な国鉄の緑の窓口、あるいは銀行のオンラインシステム、またちょっと見えない所では道路、交通機関等の制御、また空にある人工衛星等の制御、その他、製品を作る工場全体をコンピューターで制御している所もあります。

このように皆さまが多かれ少なかれコンピューターの世話にならない日はないという時代になってきました。日常の大きな役割をになっているコンピューターですが、意外に歴史は浅く、日本の例で申しますと国産一号機は一九五六年五月に生まれました。まだ二十六歳にしかなりません。この一号機は富士写真フィルム株式会社製作のもので、なつかしい真空管千七百本あまりを用いたもので、大きさは幅四メートル、高さ二メートル、奥行き七十センチメートルという大きな

ので、費用も当時の金で二百万円、現在の金になおすと約一千百万円程度になります。

これで出来ることは簡単な演算だけです。たいへんな代物である二十六年前の花形は現在では人間の小指の先ほどの大きさとなり、値段も数千円程度のICチップと呼ばれるもので間に合います。ですからこの二十六年間でコンピューターはたいへんな進歩をしてきたわけです。

一方、現在のコンピューターはどうかと申しますと、一秒間に約三百億回の演算をします。これは光が約一センチメートル進むあいだに一回の演算をするという超高速になります。またその演算をする最小単位の素子ですが、その大きさは数ミクロン、千分の数ミリメートルというたいへん小さなものです。

このように進歩したコンピューターですが、ここでその背景を述べてみましょう。つまりこれだけの進歩の裏には学問が進歩してきたと言えるわけです。とりわけ物理学の量子論が大きく進歩しました。これは一口に言えば電子の動きを知る学問です。言い替えれば、どういう状態で、どういうふうにすれば電子はどのように動くかというのを研究する学問とも言えます。この学問はコンピューターとたいへん密接な関係を持っています。と申しますのは、コンピューターというのは二進法で演算するわけですが、その二進法の一と〇の状態になり得るものをどれだけ多く持ち、なおかつ〇から一、一から〇と変わり得るスピードがどれだけ早いかでコンピューターの性能がきまるわけです。

もう少しわかりやすくして、これをソロバンにたとえるならば、一と〇をどれだけ多く持つかが桁数になり、〇から一、一から〇に変わるスピードが、ソロバンの玉を動かす速さに相当します。そしてソロバンは桁数が多いほど、また玉を動かすスピードが速ければ速いほどソロバンはよい性能を持つと言えるわけで、コンピューターの性能も〇から一に変わり得るものがいかに多く、また〇から一に変わり得るスピードがいかに速いかで決定されるわけです。

このことを現在は電子のやりとりでやらせています。つまり電子のやりとりをいかにうまく行うかがコンピューターの性能を決定していると言えるのです。かなり大ざっぱな話ですが、電子の動きをいかに知るかがコンピューターの進歩を決定しているということになります。そしてこの電子の動きを正確にとらえているのが物理学のなかの量子論です。これがかなり大切な学問の分野であることはおわかりいただけたと思いますが、肩の凝る話でたいへん恐縮ですけれども、この量子論について少しお話ししましょう。

不思議な電子の動き

ここで量子論をお話しするために、物質のいちばん小さな単位である原子を思い浮かべて下さい。あらゆる物質のなかでいちばん単純な水素原子ならなおよいでしょう。

皆さんご存知のとおり、水素原子は陽子が一個、電子が一個の原子で、ちょうど太陽と地球のように陽子を中心に電子がそのまわりを回っている光景を思い浮かべることになるでしょう。実は高校までの物理化学ではそうなっておりますが、実際には正しくありません。本当を申しますと、ここからが量子論になるわけですが、陽子のまわりを電子はあのような円軌道を動いているわけではなく、電子はある一つの電子雲と呼ばれる雲のような範囲の中を動きまわるわけです。しかもその電子が正確にどの位置にあるかということは言えません。

それなら量子論では電子の位置をどのように決定するかといいますと、電子がある瞬間にこの範囲にある確率が何パーセント、また別なこの範囲にある確率が何パーセントというふうに、確率であらわす以外に手はありません。

大ざっぱな話で申しわけありませんが、詳しいことは別な機会にゆずることにします。このように電子の動きは確率でしかあらわせないのです。このようなことを導き出すために多数の学者がぼう大な計算と大規模な実験とをかず限りなく行ってきました。現代数学の最高の計算を行い、実験装置も大きさが直径二、三百メートルもあるようなリングサイクロトロンと呼ばれる加速機を使用し、いまでは実験装置をいかに作るかが一つの産業の分野にまでなっているような大規模な実験等で導き出されているのですが、こんな実験でわかってきたことは、電子が存在するのは確率でしかあらわせないという、はなはだ頼りない、なんともわけのわからない結果になっているのです。

電子こそテレパシー現象のカギ?

ここで誤解を避けるために申しますと、もちろん過去の物理学に比較すれば、現在の物理学は比較にならないほど電子の動きを正確にとらえており、これがコンピューターの進歩の裏付けになっています。

ところが、やはり確率でしかあらわせないということで、まだ不明な点があります。このことを少しきつめると多少はテレパシーの原理をお話しできるかもしれません。

結局、コンピューターを発展させてきた物理学のなかの量子論とは電子の動きをとらえるのですが、少々不明な点がありますので、この量子論よりテレパシーの原理が説明できるかもしれないということになってきたわけです。

テレパシーの原理ですが、私は物理を勉強してきたものとしてテレパシーもやはり一つの物理現象であると思います。ただ、何が、何の媒体で、なぜあのようなスピードで進むのかは残念ながらわかっていません。これはあくまで現代の科学での話でして、もっと時代が進むと、必ずやテレパシー現象は説明され得るものと思います。それでいままでお話ししてきた量子論でテレパシーを説明し得るかといえば、少しはできるでしょう。というのは、先程不明な点と申しましたが、量子論から導き出されることのなかに、電子の存在の可能性がわずかながらも無

限に位置するという確率があるのです。

また少し耳なれない言葉ですが、パイ電子と呼ばれるものがあり、一瞬その場から消えてしまうというようなことも量子論から導き出されるのです。つまりある状態をつくってやれば――残念ながらある状態とはわからないのですが――電子は時間空間を超えて、いかなる場所にも存在し得るわけです。ただその可能性が計算式から導き出される限り、非常に小さな確率であるがゆえに現在問題にされていません。

皆様いかがですか。この話はある状態をつくってやれば電子をどこへでも飛ばせるという話になるのです。正しい正しくないは別として、テレパシーの原理になり得る一つの説明ではないでしょうか。私たちがもう当たり前のこととして話している空飛ぶ円盤、テレパシー、超能力などは、科学がもっと進めばいつかは解明されるものと確信します。そして宇宙のプラザーズ（友星人）はその原理を知っているはずですし、私たちの正しい直感もそのことを知っているかもしれません。

実際、量子論がテレパシー原理のすべてを説明し得るわけでもありませんし、いま申し上げていることが本当のテレパシーの原理かどうかもわかりませんが、今後の科学に期待したいという気持で以上のような話をしました。

人間は最高に偉大な存在

話を元にもどしますと、私はコンピューターを扱う職業柄、どうしても人間とコンピューターを比較しがちになります。昨年のGAP総会で映画『二〇〇一年宇宙の旅』が上映され、その中でハル九〇〇〇という未来のコンピューターが人間の感情を持ってしまい、人間に反抗するという場面を記憶されている方も多いかと思いますが、たしかにコンピューター万能の時代がいずれやってきて、人間の言葉を理解し、音声を発し、ある程度の判断をして、完全に人間のかわりをするということになるかもしれません。

しかし、安心して下さい。コンピューターはプログラムという命令を与えるわけですが、そのプログラムされたこと以外は絶対に行わないのです。したがってコンピューターが判断機能や学習機能を持つとしても、プログラミングされていて初めて判断ができるわけです。そしてもし人間に反抗するようなコンピューターができたとすれば、それは人間がそのようにプログラミングしたわけで、決してコンピューターのせいではありません。

このようにコンピューターを知れば知るほど人間は素晴らしい生命体であると思えてくるのです。

もう少し比較してみますと、コンピューターの体を作っている最小素子の大きさですが、数ミクロンという半導体素子というものになります。この大きさで人間の体の中で匹敵するものは何かと申しますと、血液中の赤血球にあたります。コンピューターの最小素子が電子を媒介として状態が〇から一、一から〇と変わるだけなのにたいして、人間の赤血球は酸素を体中に運ぶという働きをします。赤血球は肺では酸素をもらい、血液の中を流れ、毛細血管等に入りますと、その酸素を放出して役目を果たすわけですけれども、ちょっと考えてみればわかりますように、コンピューターの素子と赤血球では、赤血球のほうがはるかに複雑なことをするわけです。このように人間の体がいかに精密であるかがおわかりになったことと思います。

創造主から与えられた素晴らしい細胞の集合体である人間の生命――。こんな巧妙な体である以上に、人間にはコンピューター以上にはるかに素晴らしい判断機能や学習機能があります。ここで私は強く感じるのですが、人間は意識と一体化した宇宙的意識を用いることができるわけです。

コンピューターはどんどん人間に近づいてきます。もしコンピューターに向上心や強い意志があるのなら、人間に限りなく近づき、人間を限りなく理解するでしょう。しかるに人間は向上心があり、強い意志もあるのですから、絶対に宇宙の意識を理解し、限りなく宇宙の意識に近づいてゆけるものと思います。

コンピューターを毎日見ていますと、コンピューターと人間、人間と意識が同様な関係に見えてくるから不思議です。

他人を許し、自分をも許す

次にお話しするのは〝許す〟という内容の話です。その橋渡しとしてスペースシャトルのことにふれてみましょう。

（ここで昨年アメリカで打ち上げられたスペースシャトルの件に言及し、最初はコンピューターのプログラムミスにより打ち上げに失敗したけれども、その後はやり直しに成功して、いまは責任者を非難する人はいないと説明し、過去の失敗にこだわることはないと説く）

そこで次のテーマである〝許す〟ということにはいりましょう。

ある人が過去において何か失敗をしても大抵のことならまわりの人は許します。ある人がその失敗にたいして教訓と受け取る以外にいつまでもくよくよしたり、そのことに責任を感じているとしたら、たいへん気の毒であり、本人にとってはマイナスでこそあれプラスではないでしょう。

ここで私が申したいのは、他人の過去を許すのはもちろんのこと、自分自身の過去や過失をも許すべきだということです。

ここに友人同士のAとBとがいたとします。そしてAがBに迷惑をかけたとしましょう。AはBにたいへんすまないと思い、いつまでもBにすまないと思っていたとします。そうなりますと、いつまでたっても二人の仲はうまくゆきません。ここでBがAを許せないというのなら話は別ですが、BはAをすでに完全に許しているとすれば、過ちをおかしたAという人はそのことをきれいさっぱり忘れて、つまり自分を許して新たな気持でBと接するほうがよいと思うわけです。それがこの場合、良い友人関係にする道だと思います。（後略）

「アダムスキー問題とUFO」

久保田八郎

先程は田中義則君のたいへん立派なご講演を有難うございました。田中君は東北大学で物理学を専攻した秀才でありまして、学生時代から遠い仙台よりときどき東京の月例会に出席して、非常にまじめに熱心に参加していたことを私はよく記憶しております。

早いものでして、GAPもこの十月でもって満二十一年になります。始めましたのが一九六一年（昭和三十六年）の九月です。その頃、アダムスキーの要請によって日本GAPというものを始めることにし、それから機関誌の第一号をガリ版で切って、たいへん貧弱なパンフレットを自分で手刷りで印刷して十数名の方にお送りしたのが最初です。

以来ずいぶんいろいろなことがありまして、とても一口ではお話しできないような不思議な事、不気味な事件、あるいは私個人の環境の大変化、また家族や親せき関係の大きな変化などがありました。特に一般のUFO問題に関しても非常に大きな変革がありまして、隔世の感があります。

一般人の錯覚

むかしからアダムスキーにたいしては賛否両論にわかれてずいぶん多くの論議が世界中で行われてきました。イギリスで出ていました『フライングソーサー・レヴュー』という有名なUFO研究誌があります。これは当初非常に親アダムスキー的な立場で彼を支持するようなかたちで出ておりましたが、途中から編集者が変わってガラッと内容も変わってきました。そればかりではなく、当初アダムスキーを支持した有名人やその他の人が沢山いたのですが、正直に言って現在は全く不利になってしまい、アダムスキーを否定する人のほうが大部分で、非常に悪く言う人が多いですね。ですから現在でも国内で一般に出まわっているUFO関係の雑誌や図書などは意識的にアダムスキーという名を避けるようにしているようです。

この最大の原因は米ソ両国が打ち上げた惑星探査機によって、金星や火星などを調べた結果、太陽系の地球以外の惑星には人間はいないんだということが一般化してしまい、それをあたかも真実であるかのごとく一般人が信じ込んでしまった点にあると思います。

ところがよく調べてみますと、太陽系の地球以外の惑星に人間はいないんだということが正式に政府の声明として発表された事実はありません。アメリカやソ連もそんなことを政府発表として言ってはいません。アメリカの大統領がそんなことを言ったということを新聞記事でお読みになった方がいらっしゃいますか。いらっしゃらないでしょう。私も読んだことはありません。つまり政府が正式見解として発表しないで、一部の科学者が言っていることをあたかも絶対的な真理であるかのごとく思い込んで一般人が信じ込んでしまったというのが現状だと思います。

こういうことはよくあります。政府間の陰謀とか策略とかには一般大衆の及びつかないものがありまして、何が行われているか、わかったものではありません。いま読売新聞にカーター元大統領の回顧録が連載されていますが、実に意外な事実が次々と明るみに出ています。もちろんこれは新聞がわるいんじゃなくて、いわば情報源によって一般大衆が惑わされているということになります。だから一般人は錯覚を起こしていると思います。

隠すのは大混乱を避けるため

しかしアメリカ政府の全部の役人がそうではないと思いますが、一部のある種の高官、科学者の方々は、地球以外の惑星に人類――しかも偉大な人類が住んでいることを、とっくの昔に知っているはずです。一昨年私がアメリカへ行きましたときにもそのようなことを聞きました。「彼らは知って知り抜いているけれども現状ではどうすることもできないんだ。そんなことは言えないんだ」ということでした。

なぜ言えないかと申しますと、いま問題になっております日本の教科書問題ですが、侵略を進出と書き替えただけで、あれだけのごうごうたる非難をあびて、日本政府から中国に詫びを入れて訂正しましょうというような外交問題にまで発展したぐらいですから、ましてアメリカ政府が公式見解として、地球以外の惑星、特に金星には素晴らしい発達をとげた文明があり、偉大な人類がいるんだと発表しようものなら、どんなことになるか、これは明白です。大変な大混乱が起こるにきまっています。

まずウォール街の株価が大暴落し、ドルも大暴落するでしょう。こうした経済的な混乱につけ込んでソ連あたりが攻撃してくるでしょう。へたをすれば大戦争になりかねません。これは逆にソ連がそのような発表をしても同じことになると思います。

こんなことまで考えないで、ごく単純に、「アメリカ政府が知っているものなら、なぜ発表しないのか」と言う人もありますが、そういうわけにはゆかないでしょう。もっと単純な人は、「UFOが実在するものならば皇居前広場に着陸すればいいじゃないか」と言ったりします

が、そんなことをすれば日本はつぶれてしまいます。そこまで上の方では（異星人は）ご存知のはずですから、そんな軽はずみなことはなさらないでしょう。

私は確信する

私個人としましては、もちろん太陽系の地球以外の各惑星に偉大な文明が存在していて、素晴らしい人類が住んでおり、そこからスペース・プログラムというかたちで、昔から地球にたいして援助の手が差しのべられてきたと確信しています。

そういうわけでアダムスキーの体験なるものはまぎれもない事実であって、しかもものすごい、超絶した内容であったと思うんですが、あれはちょっと発表の時期が早すぎたとも言えます。もちろんあれはスペース・ブラザーズ（友星人）のご配慮のもとに発表されたのでしょうが、あとで考えてみますと、結果的には戦後の大混乱のおさまりきらないうちに発表されたものですから――それは核兵器の発達を阻止しようという意図のもとに行われたのかもしれませんが――ちょっと早すぎたような感じもします。

でも、いつの時代でも真実のカギを握る人が非常に不利になっても、それを支持する人は必ずいるんです。イエスの弟子たちがそうです。あれだけのひどい目にあいながらも、最後までそれを助けようとした少数の人がやはりいたんです。

アダムスキーの場合でも、私たちばかりでなしに世界中に、いまだにアダムスキーを肯定して支持する方がいます。私が知る限りではまだ各国に相当数いるようですが、もう表面には出ません。

アダムスキー型円盤はいまも出現する

アダムスキーをインチキ呼ばわりする人がいまだにあとをたちませんが、これにたいして腹を立てても仕方がないですけれども、この人たちはある重大な事実を見のがしているか、あるいはわざと無視していると思われるフシがあります。

それはどういうことかといいますと、アダムスキーが撮影した金星の円盤の写真や母船の写真ですが、特に円盤写真などは模型や電気掃除機を写したのだとか、あるいは孵化器を写したのだとか言う人がありましたが、しかしいまだにあれと全く同じタイプの円盤が世界中に現れるんです。日本でも現れています。あのようなUFOを見たという人は一人や二人ではありません。

アダムスキーが模型をつるして写したというのならば、その模型がいまだに世界中を飛びまわっているということになります。こんな不合理な話はありません。このことを考えてみますと、アダムスキーの円盤写真がいかに重大な物であったかということがわかるはずです。

ある壮絶な体験

私自身としましては、内容ははっきり言えませんが、今年の六月のある日、ある場所で、ものすごい体験を持ちました。壮絶きわまりない体験だったと言ってよいでしょう。過去にもいろいろ不思議な事がありましたが、今年になってからはそれが一つの大きな出来事でした。

このことからみて、いわゆるスペース・ブラザーズ（友星人）は日本GAPを注目され、ひそかに援助しておられることを腹の底から感じて感動した次第です。「それならくわしいことを話せ。証拠物件を出せ」といわれても証拠物件はありません。

そんな思わせぶりなことを言うようなら、初めから言わなければいいじゃないかと思われましょうが、この程度までは言いたいですね。これは皆様に刺激を与えて激励するためです。

空中を観測しよう

いわゆるUFO出現事件は今後も絶えることはないでしょう。そしてアダムスキー問題もごく緩慢ながらも次第に一般人に認識されて注目される方向にゆくと思います。明日、明後日というような急速なものではないでしょうが、長い年月をかけてその方向に行くでしょう。

ですから皆様方も宇宙哲学によって自分の魂を磨き、精神を向上させ、人格を陶冶することも大切ですけれども、一方ではできるだけ空を観測して、実際に自分の目で空中に現れる素晴らしい物体をごらんになることをおすすめしたいのです。あれこそ別な惑星の文明の象徴みたいなもので、私たちは地球にいて偉大な別な惑星の文明をかいま見ていることになるのですから、これをごらんになれば、自分自身の大きな確信あるいは熱意を起こす刺激になるでしょう。空中の物体など、そんなものはどうだっていいんだというようなことでなしに、自分の目で見ることがアダムスキー問題にたいする傍証にもなりますから、なるべく空を観測するようにして下さい。双眼鏡などを用意して、ひまがあればときどき外へ出て空をながめるのです。たとえすぐにそんな物体が見られなくても失望しないで忍耐強く空をながめて下さい。

全然そんな物体が見えなくても、澄んだ夜空に無数の星が輝くのを見れば、実に気宇広大になります。これはたいへんよいことです。

▲UFO観測中の筆者

すべてを誠実に楽しく

観測される場合は単なる興味本位や好奇心ではなくて、自分とスペース・ブラザーズとは一体であるというような強烈な宇宙的想念を起こされることが必要です。

そのような宇宙的フィーリングの起こし方については、アダムスキーの宇宙哲

学関係の書物に充分に述べてありますし、私も月例会その他の会合でよくお話ししておりますから、ここでは省略しましょう。

こうした異星人やUFOの問題を考えたり研究したりする場合に重要なのは、誠実に考え、誠実に行うということでしょうね。このことは最近特に感じます。『誠実さ』というのは、いい加減な遊び半分的な考え方ではないという意味です。真剣という意味も加わりますが、少しニュアンスが違うでしょう。

これは人生のあらゆる面にあてはまります。少々説教がましい話になって恐縮ですが――。ふだん会社で仕事をするにしてももちろん誠実にやらなくちゃいけないんですが、その場合特に大切なのは自分の労働力と賃金や給料とを引き替えに考えないことです。自分は一時間いくら、一日いくら、一カ月いくらで働いているんだ、それだけやっておけばいいんだという考え方では誠実とはいえないんです。

こうしたことを一切考えないで「とにかく人のために働くんだ。自分が働くことによって会社で出来る製品は人を喜ばせるんだ」と考えていればいいんです。会社の幹部は儲けよう儲けようと思っているでしょうが、「それは幹部の考えることであって、自分とは関係ない。自分はただ良い製品を作るために誠実に働いて、それを求めるユーザーを喜ばせるだけだ」という考え方です。

そういうふうにやっていれば上司から認められるんです。労働力と賃金とを引き替えに考えないことです。世の中のあらゆる企業の労働者が全部そういうふうになれば地球は素晴らしい惑星になるでしょう。

あるいは、日常の行動のすべてを誠実にやる。メシを食べるときも誠実に食べる。しかもそれにプラス幸せな楽しい想念が必要です。そしてメシを食べる、仕事をする。道を歩くにしてもただ無考えに漫然と歩くのではなくて、誠実に歩く。それにプラス楽しい想念をもって歩く。つまり誠実に楽しく歩くのです。その他何にしてもそうです。本を読むにしても誠実に読む。人と話をしていても誠実に楽しく話す。セックスを行うときも誠実に行う。これは大切なことです。泥棒をやるときも誠実にやる。これはちょっとおかしいですね（笑）。もちろん誠実さがつらぬいていれば泥棒をやろうという考えは起こらないでしょう。

絶対の世界へ移住する

今日はUFO問題の話なのに哲学的な話になって恐縮です。しかし皆様方はUFO問題については私以上に熟知しておられると思いますから、その件はこれで省略しましょう。

誠実さというものを心の底からわき起こすにはどうすればよいかというのは、なかなかむつかしい問題です。ここでアダムスキーの哲学が導入されるんですが私たちはなにか根本的に誠実さを起こそうとする世界とは別な世界で生きているということがある程度言えます。どうしてもある程度は不誠実、不誠実とまでゆかなくても浮かれ気分、または面白半分、あるいは単なる猟奇趣味に走りがちな世界に住んでいるわけです。

そこで、もう一つの世界があるんだということを認識する必要があります。これは宗教的には「悟り」といいますが、哲学用語では「認識」といいます。私たちが日常、目とか耳とか鼻とか口とかで感じて考えている世界とはまるきり別個な世界があります。それは絶対に完全な世界、絶対に誠実な世界、絶対に愛の世界です。そして無限の英知、パワー、エネルギーなどが満ちた世界が存在するのです。どこにあるかといいますと、遠い所ではなく、万物の中にあります。人間なら人間の内部にあります。そしてその世界の中へ自分が移住してしまうとよいのです。日本から外国へ移住するように、移り住んでしまうんです。これは、プラトンのイデア論のように聞こえるでしょうが、そうではなくて、どちらかといえばアリストテレスの考え方に似ていると思いますけれども、やはり違います。根本的にはアダムスキー哲学そのものです。

その完全絶対な世界と、私たちの四官でもって考える世界とは全く別個なものでありまして、しかも両方が重なっているわけです。二つの世界から成る複合体です。私たちはマインド（心）だけで考える世界に生きているわけで、それで腹が立ったり人を憎んだりするのですが、そんな憎しみ、非難、対立などが全くない世界、本当の楽園の世界がコンシャスネス（意識）の世界です。その分裂や不調和のない世界に私たちは移住すればよいのです。この移住にはパスポートもお金もいりません。体を動かす必要もなく、いまの瞬間にパッと移住できます。これが人間の最大の移住、移動でしょうね。

しかしこれはなかなかむつかしいことです。でも簡単な、だれでもやれることをやっていたのではだめでして、むつかしいことをやらないとだめですから、私なんかはしょっちゅうこんなことばかり考えておりまして、自分で宇宙瞑想をやり、自分の意識を宇宙に拡大させる、そのためにミラクルワードをとなえるとか、イメージを描くとか、いろいろなことを常にやっております。

この肉体人間の世界から意識の世界への大移動はごく最近強烈な印象としてわき起こったのです。こんな問題は自分でジーッと考えていますと、やがて素晴らしい印象がわき起こってきます。漠然と考えて暮らしていたらだめですね。

これは地球人にとって根本的に重要な問題ではないかと思いますが、私たちのささやかな活動でもって世界中に影響を与えることはできませんから、外部に向かって大きな声で叫んでもどうしようもないですけれど、私らは私らだけで先程の民族の大移動をやろうではありませんかと呼びかけたいところです。

（以下略）

●日本GAP企画第4回海外研修旅行（昭和57年8月実施）「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」に参加して(2)〈到着順〉

忘れがたいヨーロッパ

静岡県　鈴木芳美

出発する前に訪問する国のムードを感じとってくるつもりで日本を離れました。そして十五日間の旅を終えた今、訪問した国々の風景と現地の人々の姿が鮮やかに浮かんできます。私自身多くのことを学ばせて頂いたと思っています。

最初の訪問国であるエジプトの三大ピラミッドとスフィンクスを見た時は数千年の昔へ逆戻りするようでした。古代エジプト人の来世観である魂は死なず、肉体が残っていればこの世と同じ生活をするという考えを持っていた当時の人たちの声がピラミッドの王の玄室内に満ちているようであった。また夜カルナック神殿の「光と音のショー」ではたいへん幻想的なシーンが展開していて当時の有様を想像させられてしまった。

西ドイツではあまりにも美しい自然の緑と家々が調和しているのを見て自分もそこに住んでみたい衝動にかられてしまいどうしようもない心境に達してしまった。肌寒いハイデルベルクを歩いていると、どういう訳か親しみ深いものが込み上げてきた。

ポルトガルではやはりファティマが印象深かった。六十五年前のあの劇的な場所である。樫の木の傍に御堂が立っている。ここに貴婦人の姿が見えたり円盤が出現した所なのかと思うと、スペース・ブラザーズのことを新たに考えさせられてしまった。

スペインではトレドの赤茶けた大地にある中世そのままの世界が、遠くに連なる丘といっしょになってとても哀愁深い感じのする所であった。落ち着いた雰囲気の中にいるのでホッとする思いであった。

フランスはパリに着いた。街角にあるカフェがまるでパリを象徴しているかのようであり、プラタナスやマロニエがパリのムードを盛り上げていた。また落葉を踏みしめながら歩くのもムードがあるだろうなと思いながら散歩した。また地方に行けば違ったフランスの国を発見するに違いないと思いながらパリの雰囲気にひたっていた。

イタリアのローマに着いた。映画「ローマの休日」のシーンが思い出されてくる。スペイン階段で石段の左右に草花が植えてあるのを見て思わず感激した。映画で見た光景が私の目の前に出現した。

サンピエトロ大寺院ではアダムスキーが入って行った門の両側にスイス人の衛兵が二人立っていた。そこをしっかりと記憶した。

六カ国を訪問してみて、各国を少しでも理解するように努力しなければいけないと強く感じた旅でした。

素晴らしいゲマインシャフト

高知市　野島哲浩

今回のエジプト・ヨーロッパの旅に参加させていただきましてありがとうございました。私にとってはたいへん意義深いものでした。紙面の都合でヨーロッパにしぼって感想をのべてみたいと思います。

灼熱のエジプトからフランクフルトに飛び、エジプトの雑然とした不潔さにくらべ、あまりにも整然としているのに目をみはりました。美しく整っている田園風景、アウトバーン沿線の木々の美しさ、農家の整然として落着いたたたずまい。ハイデルベルクの（今回まわった都市に共通していることですけれど）古い落ち着いた家々、木々との調和、各窓には花を植え、少しでも美しくしようとしていました。（法律で禁じられているにせよ）やたら調和を乱すような建造物、広告等も作らず古いものを大切に生かしているのには感嘆いたしました（このような美しさの原因は、日本と比較したら、意識の違い、気候風土の違い、石造、木造等考えられますが、表面的には、久保田先生もおっしゃっておられましたが洗濯物を外に干さない、また広告看板の類をやたらに作らない、電柱がないことが美観に大きく影響しているように思われます）。日本の鉄道沿線の広告類、自分の土地だからどのように使おうと勝手とばかり看板等を立てて、日本では他との調和というようなことはまず考えないだろうと思います。

また私たちはフランクフルトで市電に乗りましたが（日本の路面電車とどうしてこうも乗り心地が違うのか）不正乗車をしようと思えばいくらでもできるシステムになっているのに悪い事をする人はいないそうです。これは他の公共輸送機関でも同じだそうです。

今回の旅行では、大げさに言えば「共同社会」とは何かということについて考えさせられました。一人一人が環境に奉仕することによって環境が私たちに奉仕するということをもう一度考えてみる必要があるように思いました。

「万物は他に奉仕することによって自分に栄光を与え、かわって他のすべてから奉仕を受けます（宇宙からの訪問者）」

今回の旅行を楽しく意義あるものにして下さった久保田先生と田中さんにはほんとうにお世話になりました。また、緒に参加なされた方々、ほんとうにありがとうございました。

感動したエジプトの雄大さ

高知市　野島隆子

いよいよ二学期もスタート。真黒に日焼けしたエネルギッシュな子どもたちの姿。それに較べ、いまだに旅の夢心地に酔いしれてピント調整中の私。ゆったりした気分で子ども達を眺めながら、何とか合わそうと努力しているきょうこの頃である。

誰かが言っているように「人生は旅である」という言葉にとても魅かれていた私であるが、今回の旅行では何かを知るためというより、自分で体験し、何かを考えるために参加させていただいた。旅が何かを語ってくれるのではないか、そんな思いにかられていた。

エジプトは大自然や建築物等全てスケールが大きく、エキゾティシズムに満ち魅力十分であった。絶対的権力をも痛感した。城を中心にした西ドイツの古風な大学都市ハイデルベルク。フランクフルトは近代的、合理的で整然さを感じた。聖地の雰囲気が漂うポルトガルのファティマは奇跡の内容に心が魅かれた。中世の古都スペインのトレドの町のムードはたまらなく好きだった。懐かしかった。

心残りなのはパリ。どの街路を見ても美しく、センスがあり、暖かさ人間くさを感じた。スパゲッティのおいしさもさることながら、永遠の都はローマ。いたるところに遺跡があり、史跡の町だった。どの国を見ても百聞は一見に如かず、それぞれすばらしかった。

中でも特に印象に残ったのはエジプト。とは言ってもピラミッドや神殿や壁画ではない。ルクソールのホテルのバルコニーから見た、あの広大なゆったりしたナイル河の流れ。自然のすばらしさ。今でも脳裏に焼きついて離れない。胸にこみあげてくるものをおさえきれなかった。

自分の求めていたものがわかった。自分の心の豊かさ、広さを求めていたのだ。木蔭でくつろぐ現地の人の様は、(怠惰な感はあったが)無欲でゆとりがあった。エジプトのスケールは何と人間を小さく見せることか。私はこれからも自分の心をナイルの自然に置きかえて広く豊かでありたいと願っている。一生、無理かもしれないけれど……努力しよう。

旅行中、様々な方と出会い、共に飲み語り、いろいろなことを学ばせていただいた。生涯忘れられないほど強烈な内容や教訓もあった。言い尽くせないほどの貴重な体験を糧に、これからもがんばりたいと思っている。

このような体験ができたのも、久保田先生や田中さんの献身的な御配慮に感謝せずにはいられません。ほんとうにありがとうございました。また、参加者の皆様、たいへんお世話になりました。心よりお礼を申し上げます。

夫婦で二度もGAPのすばらしい旅行に参加させていただいた喜びを、今、しみじみとかみしめています。

親切さと純粋さを感じた旅

大阪　斎藤康美

お礼が遅くなりまして大変申しわけありません。今度の旅行は申込み時点で危ぶまれたのですが、参加OKが出ました時は実に嬉しかったです。出発当日はお見送りの皆さんへお礼を忘れて、先生に促されて気づくドジ。カイロ早朝出発時刻に遅れる大失敗。飲み過ぎまして御迷惑をおかけする失敗。各国での珍しさに心が奪われ、あわててついて行きましたが、これも撮影失敗でした。反面、カイロの合同夕食会では驚きました。

エジプトのピラミッドや各遺跡群のスケールのデカさ。何かメキシコと似ていたカイロ市内やタクシードライバーの運転ぶり。大事件のあったファティマでは、熱心にお祈りしている人々への感動。二十数年前、ア氏が入られたサンピエトロ大寺院の小門の前に来れたという実感。私の特に憧れていました所だけ書かせて頂きましたが、その他、各国での楽しかった事、ガッカリした所、もっとゆっくりしたかった所など、こまかく書きますとキリがありませんので割愛させて頂きました。わずかな滞在でどうこうは言えませんが、「百聞は一見にしかず」の六カ国訪問でした。失敗はありましたが、日々楽しく過ごせましたのも、すべて先生や田中さん、同行者の皆さん、そして各国のガイドさんや同地の人々の御親切なおかげでした。

この二週間の旅を通じまして、特に親切さ、純粋さ、純真さを痛感させられました。本当に貴重な体験が出来ました。どうもありがとうございました。最後に、次回、ヨーロッパ企画の時には是非ルールドを加えて頂きまして、再度同コースを回ってみたく思います。それとニュージーランドのマオリ族の訪問の企画が実現しましたら、このどちらかに参加出来たらと思っています。

●支部報紹介　(下記以外に各種支部報が出ています)

題号	松山支部報	シズオカ・コズミック・フィーリング	仙台支部報	ポイセズ・オヴ・コズミック・フレンズ
最近号	No.29	No.48	No.9	創刊号
判型・総頁	B5・10頁	B5・12～14頁	B5・2頁	B5・18頁
印刷方式	手書きコピー	〃	タイプ打ちオフセット	手書きコピー
定価	無料	無料	無料	無料
送料	¥170	無料	¥60	¥170
発行所	松山支部	静岡支部	仙台支部	沖縄支部
申込先	〒794 愛媛県今治市黄金町1丁目4－4 伊藤達夫	〒422 静岡市西島304－9 野口敏治	〒980 仙台市東10番丁1国鉄アパート1－18 笠原弘可	〒904 沖縄市住吉町2-2-16 佐渡山方 新里義雄
備考	手書きなるもたいへんきれいに仕上げてある。	2月6日、静岡支部月例会終了後、50号発行記念パーティーを開催の予定。詳細は05588-3-2211高梨和明宛に	編集・タイプ打ちは安藤澄雄氏が担当。8号30部在庫あり。	久保田会長のメッセージ、「ハイビスカスのように燃えよう」が巻頭を飾っている。

第3回 仙台・山形合同支部大会

●十一月十四日（日）
●東京第一ホテル仙台（仙台市）
●出席者　四十五名

この日快晴となった仙台市に全国各地から予想以上の参会者が集まって盛大な大会になった。まず久保田会長の「アダムスキーは不滅なり」と題する講演から開始。スペース・ブラザーズとのコンタクトにはテレパシー能力開発が必要と説き、相手を本物の友星人かニセ宇宙人かを見抜くことが最重要と力説。他にも高次元な話がユーモアまじりに約一時間余続いて一同のフィーリングを高揚させた。

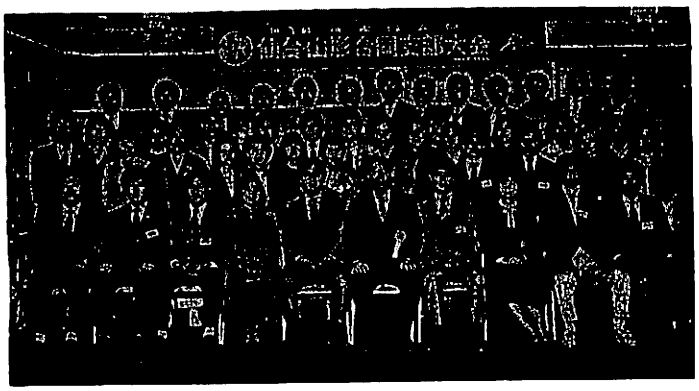
休憩・記念撮影・自己紹介・座談会に移る。今回は最初の試みとして「想念観察」というテーマを設けて各自の意見や質問を出してもらったが、範囲が限定されたために結果的には拙かったと後に会長より聞いた。もっと多角的に広範囲な質問が出るほうがよいとのこと。次回からはあらためたい。

司会は前半が安藤澄雄氏、後半の座談会では宮城県出身で現在東京月例会の司会者をつとめる田中義則氏が担当。五時に盛会裡に閉会した。

夕方六時からはホテル別室で立食形式による夕食会が開催された。静岡支部代表の野口氏の音頭により乾杯。なごやかな雰囲気の中を余興として仙台の石田義雄氏のフルート演奏、秋田の佐藤春雄氏によるプロ級の秋田民謡等が披露され、大かっさいをあびた。八時半終了後は街へ出て二次会へと流れた。

翌十五日は有志約二十名で市内観光に出発。蓬天が残念だったが青葉城跡、野草園、榴ケ岡公園と周遊。野草園の鮮やかな紅葉に一同感嘆する。そして十六時十八分発の新幹線で会長その他の方々は帰京の途についた。

「日本GAPは一大家族である。どんな相談にも応じるから遠慮なく申し出てほしい」と言われた会長の言葉が頭にこびりついて離れない。お世話になった方々に心から感謝いたしたい。（笠原弘可）



第5回 熊本支部大会

●十一月二十一日（日）
●法華クラブ（熊本市）
●出席者　二十五名

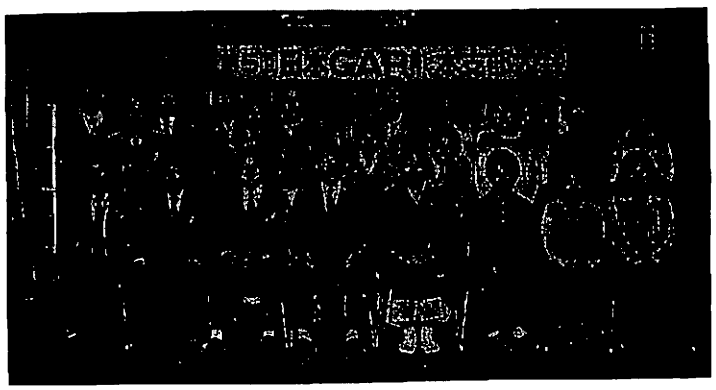
晩秋の候なるも予定どおり開催。今回は例年になく少人数だったが熱気は高まった。前日は昨年と同じ料理屋で歓迎会を開いたが、この日は東京月例会のため会長は欠席された。

翌午前中に静岡の橋口眞市氏をお供に久保田会長は空路来熊され、法華クラブ（これはホテル）内のレストランで西日本新聞記者のインタービューに応じられ、その後熊本日日新聞記者の取材にも応じられたが、これは後日両新聞に掲載された。

一時すぎよりクラブ内のホールで大会を開始。会長講演では中世のアダムスキーともいうべきイタリアの哲人ジョルダノ・ブルーノに言及。当時の天動説に反対して地動説をとなえた上、宇宙の創造パワーの存在を力説してついに教会により火あぶりの刑に処せられたという大先駆者。彼の所説こそは宇宙哲学そのものであったことを簡明に述べられた。会長の支部大会ごとの講演内容はみな違うということもこれではっきりした。そのあと自己紹介、質疑応答が活発に展開し、五時に無事終了。

夕方六時からは別室で夕食会を開催。この日は偶然にもデザートセンターのコンタクト記念日にあたり、また宮崎よりかけつけた会員・日高美智子さんの誕生日なので一同で祝福。家族的ななごやかな雰囲気で夕食会を終わり、あと二次会に行った。

翌日は阿蘇山へドライブしたが、あいにくの雨で景観はさっぱり。支部会友・緒方修氏の車で山上の火山博物館を見学。これは近代的な立派な設備に満ちている。三年連続雨にたたられた阿蘇山行きだったが楽しく下山。夕方空港より出発する会長を見送った。度重なる大会なのに支部メンバーが新鮮な気持で努力されて感謝にたえない。（津野田俊行）



〈予告〉 今年度地方支部大会 （その１）

	松山支部大会	名古屋支部大会	静岡支部大会	山形仙台合同支部大会
日時	3月20日(日) 午後１：00→５：00	4月24日(日) 午後１：30→５：00	5月１日(日) 午後１：00→５：00	5月22日(日) 午前10：30→午後５：00
会場	「ホテル・シャトーテル松山」 ９階会議室 松山市３番町４丁目９～６ ☎（0899）46－2111 国鉄松山駅より市電道後温泉行き乗車。市役所前下車、徒歩１分。 市役所横、日銀松山支店前。	「愛知県産業貿易館」西館第20会議室 名古屋市中区丸の内２－４－７ ☎ 231－6351 地下鉄「名城線」市役所下車西へ徒歩10分。名古屋駅からタクシーで¥500 程度。	「静岡交通ビル」４階大ホール 静岡駅南口前 ☎0542－83－9234	「澁陽（おきたま）綜合文化センター」 山形県米沢市金地 ☎（0238）21－6111 駅から徒歩20分。バスは市役所行きに乗り、市役所前で下車。
会費	¥2000 （希望者のみ全員記念写真・送料共¥700 グランドキャビネ判）	¥2000 （写真の件、左に同じ）	¥2000	¥2000 （写真の件は松山支部大会と同じ）
プログラム	１：00 支部代表挨拶 伊藤逸夫 １：10 会員講演 中川敏恵 １：40 講演「アダムスキー問題の重要性」 久保田八郎 ２：50 休憩・記念撮影 ３：20 記録映画「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」 ４：30 全員自己紹介・質疑応答 ６：00 閉会	司会 斉藤寿文 １：30 支部代表挨拶 林国宜・武田充弘 １：40 講演「宇宙の法則とアダムスキー問題」 久保田八郎 ３：10 休憩・記念撮影 ３：30 全員自己紹介・質疑応答 ５：00 閉会	司会 高梨和明 １：00 支部代表挨拶 野口敏治 １：10 会員講演 光井寿子 １：45 講演「スペース・ブラザーズへの呼びかけ」 久保田八郎 ３：00 休憩・記念撮影 ３：15 全員自己紹介・質疑応答 ５：00 閉会	司会 田中義則 10：30 支部代表挨拶 清水正、笠原弘可 10：45 記録映画「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」 １：00 会員講演 本山恒明・伊藤睦史 ２：00 講演「宇宙の法則の生かし方」 ３：40 休憩・記念撮影 ４：00 質疑応答 ５：00 閉会
夕食会	大会終了後 ６：30→８：30まで同ホテル10階「ゴールドの間」で希望者による夕食会を開催。 会費 ¥4000	大会終了後 ６：00→９：00まで希望者による夕食会を名古屋駅付近の会場で開催。 会費 ¥4000	大会終了後 ６：00→８：00まで静岡ステーションホテル８階で希望者による夕食会を開催（立食形式） 会費 ¥4500	大会終了後 ６：00→８：00までホテルサンルート米沢で希望者による夕食会を開催。 会費 ¥5000（清水正氏と中川敏恵さんの結婚披露をかねて行います）
宿舎	「ホテル・シャトーテル松山」をお世話します。 シングル１泊4800（税・サ込） ツイン １泊8000（ 〃 ）	「パークサイドホテル」（たての街）をお世話します。 シングル１泊¥4900 ツイン １泊¥7500より	静岡駅南口前「静岡ステーションホテル」をお世話します。 シングル１泊¥4400	「ホテル・サンルート米沢」をお世話します。 シングル１泊¥5000程度
申込	夕食会・市内観光・宿舎希望の方はハガキにその旨を記して２月末までに下記へお申込下さい 〒794 愛媛県今治市黄金町１丁目４－４ 伊藤逸夫 ☎（0898）22－3060	夕食会・宿舎希望の方はハガキに宿泊日を書いて３月下旬までに下記へお申込下さい。 〒458 名古屋市緑区鳴海町漆山79－３ 武田充弘 ☎（052）622－7339	夕食会と宿舎希望の方はハガキに宿泊日を書いて、その旨を４月24日までに下記へお申込下さい。連休のために早目にお願いします。 〒422 静岡市西島304－９ 野口敏治 ☎（0542）86－7729	夕食会・宿舎希望の方は宿泊日と共にその旨を記してハガキで５月15日までに下記へお申込下さい。 〒992 山形県米沢市松が岬２丁目４－31 清水 正 ☎（0238）21－5441
備考	大会前日は希望者だけで歓迎会を開催。大会翌日は希望者だけで松山近郊へドライブ。 ※３月は支部大会のために月例会は中止。	大会翌日は郊外へドライブの予定。 ※４月は支部大会のため月例会は中止。	大会翌日は希望者による静岡近郊へ観光を予定。 ※５月は支部大会のため月例会は中止。	大会翌日は希望者だけで天元台（スキー場で有名）へマイクロバスでドライブ。 ※５月は支部大会のため両支部共月例会は中止。

※上記の他に今年度は次の各支部大会が予定されています。札幌・旭川合同支部大会（６月26日）、大阪支部大会（７月17日）、秋田支部大会（８月28日）、熊本支部大会（11月20日）。

感動的な秋の総会

神奈川県　関　高明

八十二年度日本GAP総会が大成功であったことを心からお喜び申し上げます。今回の総会も本当に素晴らしく感動に溢れたものでした。先生をはじめ役員の方々の御尽力に心から感謝申し上げます。今年は各支部大会に出席して知り合いになった会員の方々が多く、再会できて嬉しく思いました。

田中氏や先生の御講演を拝聴致しまして「許す」ということと「誠実」ということを教えられ、自分の至らない点を直すよい機会を得たように思いました。私は今後(イ)自分と他人の過去にこだわらない。(ロ)愛と誠実さをもって物事にあたるように頑張ってゆきたいと思います。

そして午後の部の映画「十戒」はスペクタクルに溢れて感動的な内容でした。私が今までに見た映画の中でこれほどに涙を流しながら見た映画は初めてです。特に、どんな環境に人々がおかれても自己の正しさを堂々と主張するモーゼの勇気ある態度は立派なもので、私が学ばねばならない重要なことであると思いました。

これからもスペース・プログラムへの協力と人格の向上（宇宙哲学の研鑽）をめざして頑張って行きたいと思いますので、御教示、御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

やるからには勝つ

千葉県　吉沢晴雄

仙台・山形合同支部大会では先生の素晴らしい御講演をどうも有難うございました。GAPに入会させていただきまして三年目となりましたが、今まではGAPが何であるか全く分かっていなかったと思いました。実に考えさせられ、得るところが多く、参加して良かったと思っています。

とはいえ、実践面ではまだ何もしていないので今後何が出来るか考えながらやってゆきたいと思っています。よろしく御指導をお願いします。テレパシー練習もほとんどしていないのですが、今はアダムスキーの書物を読んで内容を思い返すことからやっています。

皆さんが具体的な奉仕を考えておられるなかで、いまだ自分の事だけで手いっぱいという恥ずかしい状態ですが、これも何とかしたいと考えています。総会の時に司会者の篠さんが「今日が成果を確認し合う総決算の日である」とおっしゃっていましたが、私にはこれから春先にかけてもうひとつ総決算があります（大学受験のこと）。先生が「やるならば勝たなければいけない」と言われましたが、全くその通りだと思います。

今回の機関誌79号は巻頭言が復活して嬉しく思いました。宇宙哲学の内容は大変豊富で奥深いですから、このように先生にまとめていただくと分かりやすくなります。私などがこのようなことをいってしまうと失礼になるかもしれませんが、読んでいると、雑誌として一般書店において、他の（興味本位の）商業誌に負けない体裁をととのえる努力は大変なものであろうと感じられます。これからもご活躍下さい。

秋田市で78号完売

秋田市　伊藤正治

長い間御無沙汰をして大変失礼を致しました。先日はニューズレター（機関誌）をありがとうございました。また本日（十一月八日）は書店用のニューズレターも届きました。ありがとうございました。前号の78号は当地の書店にて全部売れ切れまして大変喜んでおります。79号から少し冊数を増そうかと思っておった所でしたが、連絡が遅れて大変申し訳ないと思っております。今回も十冊でやってみようと思います。秋田でGAP会員以外の方に十名もこの深遠なる本を読んでいただいたと思うと、大きな喜びを感じます。

私自身、日常の繁雑な生活に追われて、あまりまじめな会員ではありませんが、一般の方に少しでも多く宇宙の真髄書（ニューズレター）を読んでいただき、プラス想念を持っていただくことは全人類に幸せをもたらす（小さいけれども）大きな要因ではないかと思っております。

次号の80号からは是非もっと店頭売りをふやしたいと思います。なお79号の表紙が大変すばらしいと思いました。中身はまだ十分に読んでおりませんが、聖骸布の謎は歴史読本で読ませていただきました。大変広く調査をされ、深く研究されたすばらしい内容だと思いました。何回もじっくり読んでみます。

十一月十四日の仙台・山形合同支部大会で先生にお会いできると楽しみにしておりましたが、突然、当町内におきまして全国紙にも載るようなショッキングな事件が起きました。大変悲しい痛ましい事件で、私自身精神的に動揺しまして出席を失礼することにしました。今回の事件では色々な事を考えさせられました。私にとって人生の大きなレッスンになると思っております。御健康と御活躍をお祈り申し上げます。

過去世の記憶がよみがえる

北海道登別市　山崎泰照

お元気でいらっしゃいますか。毎日ごくろうさまです。実は住所移転のハガキを書こうと思っていたところ「手紙にせよ」というフィーリングがわき起こったので手紙にしました。思えば先生に手紙を書くのは初めてなのです。中学生の頃から何度か書こうとしたことはありますが。ただあえて言葉にするなら「あなたは一人で歩けるようになるまでを、一人でしなさい」というような印象を感じていましたので、まず自分なりにしてみたかったのです。今は一人で歩けるようになった……という訳ではありません。そのような印象その他いろいろな事がすべて過去のものとなりつつあり、すべてが済んでしまったような感じが時々するのです。

ところで私は宇宙開発やアダムスキー問題、宇宙の法則、宇宙の意志あるいは創造的意識等について非常に興味があるのですが、そもそも私の誕生日が一九五七年十月三日で、翌日スプートニクが打ち上げられてこの年は宇宙開発やGAPにおいて一つの契機となった年なので奇妙に思うことがあります。

さて私は幸いなことにもアダムスキー問題や教えなどに出会う前に、自分でいろいろ体験し、それが理解する上で助かっていると同時に、アダムスキー氏の教えに確信をもたせてくれてます。転生について記憶をさかのぼりますと、三歳前後の冬、外で曇り空を見上げていた時、ふと自分に気づきました。そして自分が前生住んでいた所の空の様子と自分がある惑星から別な惑星へ行って、そしてふたたび地球にもどってきた事（今では詳細には思い出せませんが）と、生まれてからその時までの記憶を思い出しました。

その時強く感じた事は、今強く意識して記憶しようとしない限り、これ以上あとになってからではもう思い出すことはできなくなるでしょうという印象です。あとで「スペース・ブラザーズはなぜ来るのか」の中に「七歳をすぎるともう子供は記憶を次第に失い始めます」という箇所を読んだ時、ハッとしました。

また、生まれてしばらくは見ることも聞くこともできないとか、人間は瞬間的に生まれかわり、霊界は存在しないということですが、生まれ

て数カ月くらいでしょうか、自分は存在しているのですが、見たり聞いたりした記憶はありません。もっとも眠ってばかりいたからかもしれません。生まれて翌年の初夏には近くの川へ父に抱かれて行った記憶はあるのですが……。さらにさかのぼりますと誕生日になります。この前後はよく思い出せないのですが、前日の夕方かあるいは少し前は前生の肉体にいて、広々とした野原に寝て空を崇高な憧れのような感じで見上げていました。三十歳前後のような肉体です。その世界にはいわゆる老人という感じの人はいなかったと思います。生まれかわる時の印象は丁度光の国からまっ暗なトンネルを通って、ふたたび光の国に来たという感じです。ほんの一瞬の出来事のようでした。今は過去世の透視はできませんが、何かのきっかけでふとよみがえることもあります。（後略）

素晴らしかった総会

広島市　佐々木朋子・智子
（双子姉妹会員）

先日はあのように素晴らしい総会に参加させていただき、本当にありがとうございました。篠さんの堂々とした司会、田中さんの立派な講演、そして久保田先生の素晴らしい講演、最後は名画「十戒」と続き、本当に素晴らしい時を過ごすことができ、また勉強にもなりました。

先生が講演で話された「誠実さ」のお話は話たちにとってとても為になりました。「誠実に楽しく」を常に肝に銘じて生活したいと思います。

また、内部に存在する「絶対なる意識の世界」へ移住するというお話はとても素晴らしい考え方だと思いました。その移住にはパスポートやお金は必要ないでしょうが、それ以上に得ることの難しい強い信念と宇宙の意識への絶大な信頼が必要なのですね。まだまだ未熟でこの二つをしっかりと手にしていませんが、きっといつか「信念」と「意識の世界」への移住という二つの確かなトランクを持って移住したいと願っています。

総会後の夕食会ではたくさんの熱心な立派な方たちにお会いして、自分もボーッとしてはいられないなと強く感じております。どうぞこれからもよろしく御指導下さい。

日本が上位？

在米ワシントン州　広田真知子

いつも「宇宙哲学とUFO」誌を送って頂いてありがとうございます。いまはGAPのニューズレターだけが唯一の日本語で読める情報で、いつも楽しみに待っています。

アメリカでは他の州は知りませんがTVで日本ほど熱心にUFOのことをやらないので少々がっかりしました。日本人よりもアメリカ人のほうがUFO肯定者が多いとも聞きましたが、私はあまりそう思いません。オープンマインドも時としてだらしなさにつながっているのも否定できません。日本もアメリカもどこにいても一長一短ですね。人のことは言えませんが、Anyway, have a happy new year！ Love.

誠実さこそ愛

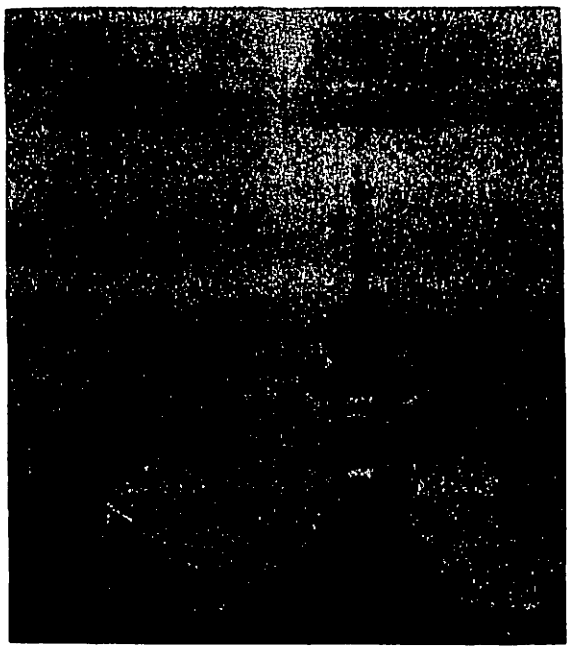
青森県　大久保千秋

久保田先生を見ているといつも変化（学び）があります。まったく頭が下がります。つねにつねに人との交友と、またあるときは本からも、良き事柄はつねに率先して実行していらっしゃる姿はとても涙ぐましいし、たくましいし、素晴らしいし、それでいて、こんな姿にぜんぜん注意をしない人々がいるということも「事実」。価値観というよりも、人間とよばれている生物が、どんなことをエネルギーにして生きているのか？　または、それがどんなに「ものすごいもの」であるかもしらないらしい。

ここで一つことわっておきたいことがあります。それは自分は書きたくないのですが、しかし書きたいという衝動があるからです。けっして自分の言っていることがすべてとは思わないし、書けば書くほどつけたしたくなるこの「印象」が「思いあがってはならない」と無言のうちにおしえてくれるからです。誠実さこそ愛という道に通じるものであるとはアダムスキー氏や過去の偉人が言っておられますが、本当だと感じます。誠実さという言葉には無限の努力と、そうしなければならないという衝動が加味されています。この加味されている意味を感じとれる人はライフスパンという過程において堅実な進歩を約束されています。その加味されている意味を感じとれるだけでなく、実行にうつす人は、もっと大いなるものを約束されるでしょう。ただそう感じるだけですが——。

●ライン河畔のUFO？

去る八月に実施の「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」に参加した萩森孝雄氏（京都府宇治市）が西ドイツのライン川下りの船上から川岸を撮影したら奇妙な黒い物体が写っていた。UFOか？‖写真左上。



●御礼

私たちの結婚をGAPで祝福して下さいまして有難うございました。ユーゴスラビアでは心あたたまるもてなしを受けました。いまはパリに住んでおりますが生活にもなれております。会員の皆様のご多幸をお祈り致します。　在パリ　八木伸枝
（元大阪支部所属　旧姓大竹）

●おめでた

大阪支部代表の一人、山田宏三郎氏は去る十月十日めでたく結婚にゴールイン。ご多幸を祈る。

だれにもわかる「生命の科学」1982年版
第２部予約受付中！
1982年度東京月例会における久保田会長による「生命の科学」解説講義の講義録。２月下旬発行予定。
Ｂ６版　活字タイプオフセット印刷
４～６月分　頒価500円　送料170円
申込先　〒989-16　宮城県柴田郡柴田町大字本船迫字内沼田96－２
安藤澄雄　振替仙台7-30019
※第１部（１～３月分）在庫有￥700　〒170

訪問地紹介

■エルサレム　イスラエルの首都。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教の聖都として世界に名高い都市です。人口は約30万。テルアビブから約70km。市内は城壁に囲まれた1km四方の旧市街と、西北に発展したモダンな新市街から成っています。大昔カナン人の土地でしたがメソポタミア方面からユダヤ人が侵入し、前1000年頃ダビデ王が都にして、その子ソロモン王は市内のモリア山に壮麗な大神殿を建立して栄華の極に達しました。その後、586年バビロニアのネブカドネザル大王がエルサレムを攻略して神殿は灰燼に帰したのですが、前63年にローマ帝国の属領となり、ときのヘロデ王が神殿を改築しました。イエスが出現したのはこの王の治世の頃です。以来2000年間、市内は多数の戦乱と闘争の場と化して変貌しましたが、イエス関係の遺跡としてはビア・ドロローサ（十字架の道）、聖墓教会（ゴルゴタの磔刑場跡）、オリーブ山、ゲッセマネ庭園、シオン山、最後の晩餐の部屋、その他多くの場所が残っています。エルサレム到着後、まっ先に十字架の道（イエスが十字架の横木をかつがされて刑場まで歩いた道）を私たちも歩きます。

■ビア・ドロローサ（嘆きの道。十字架の道ともいう）　イエスの死後、母マリアが毎日城外の村からキドロンの谷を上って、イエスがゴルゴタの刑場までを歩いた道をたどりながら、受難の場所ごとに立ち止まったという位置がステーション（留）として明示されており、その道のりを意味します。エルサレム最大のハイライトです。

第1ステーション　現在はフランシスコ会とシオン修道女会となっている位置で、ここでイエスはローマ総督ピラトの裁きを受けてムチで打たれた。ピラトが死刑を宣した場所。

第2ステーション　イエスが紫色の衣を着せられ、イバラの冠をかぶせられてムチで打たれた場所で、ムチ打ちの教会という建物で覆われており、その中にわずかの敷石が残っているが、これこそイエスがゴルゴタまで歩いた道で残存している唯一のオリジナルの部分といわれている。

第3ステーション　イエスが十字架の横木をかついで歩きながら最初に倒れた場所。

第4ステーション　母アリアが受難のイエスに会って激励した場所。

第5ステーション　ローマ軍の兵隊がクレネ人のシモンという男をつかまえて、剥り果てていたイエスのかわりに木をかつがせた場所。

第6ステーション　イエスを慕う女性ベロニカが、血と汗をふくようにとイエスにスカーフを差し出した場所。現在は聖ベロニカ教会となっている。

第7ステーション　イエスが2度目に倒れた場所。

第8ステーション　イエスが、ついて来た人々を振り返り、エルサレムの運命を予言した場所。ここでイエスは心配する婦人たちを逆に慰めた。

第9ステーション　イエスが3度目に倒れた場所。

第10ステーション　ここからは聖墓教会の内部となる。イエスが衣服をはぎとられた場所。

第11ステーション　イエスが十字架にかけられた場所。

第12ステーション　イエス終焉の場所。息絶えたときに地震でできたという白い岩の裂け目が2つの祭壇の下にある。

第13ステーション　聖墓教会の入口近くのホールに方形の石板があり、この上で十字架からおろされたイエスの体に香油を塗ったという。

第14ステーション　入口の左に祭壇があり、その下に小さな石室のイエスの墓がある。左手の白い石の台にイエスの体が安置された。

■聖墓教会　四世紀に初めてキリスト教を公認したローマのコンスタンチヌス帝の母ヘレナは熱心なキリスト教徒でしたが、325年にカルワリオの丘（ゴルゴタの丘）を訪れて十字架を発見し、この地に記念聖堂を建立したのがはじまりです。その後数度の戦乱で破壊され、現在の聖墓教会は十字軍が建てたのを1808年に改築したものです。上記の第10～14ステーションは聖堂内に含まれています。ここは要するにイエスの磔刑の場所です。

■シオン山　旧市街を囲む壁の南にある小高い丘。現在は頂上に僧院があり、ダビデ王が居城とした場所で、王の墓もあります。昔ここにあった家でイエスと12使徒が最後の晩餐を行いましたが、その部屋はいまも保存されており、これも見学します。ユダヤ人の国家建設を目指すシオニズムという言葉の語源にもなった丘です。

■オリーブ山　エルサレムの東のキドロンの谷を隔てたゆるやかな丘陵地帯で、全山オリーブの木で覆われています。イエスが弟子たちに説教をした場所として名高く、彼の最後の日に関係のある多くの教会があります。

■ゲッセマネ庭園　イエスが最後の晩餐のあと弟子たちと共に来て、最後の祈りを行いながら夜をすごした所で静かな小さな庭です。隣の苦悩の教会の祭壇前にある岩の上にイエスが膝をおろしていたといわれています。

■モリア山　旧市街の中に高くそびえる山で、テンプル地区とも呼ばれます。3000年前にソロモンがここに巨大な神殿を建てましたが、のちにバビロニアのネブカドネザルに破壊されました。現在はイスラム教の岩のドームとアクサ・モスクが建てられ、メッカ、メジタに次ぐ聖地となっています。ここでマホメットが昇天したという伝説が残っています。

■嘆きの壁　テンプル地区の西南にあるユダヤ人の聖地ヘロデ王の神殿の外壁であり、岩のドームを囲む壁の一部でもあります。神殿の破壊やバビロン捕囚などを悲しんだ古代のユダヤ人がこの壁に手を当てて泣いたといわれています。

■イスラエル博物館　ユダヤ人と中東の宗教芸術の粋を集めたベザレル博物館、考古学・聖書博物館、古文書を集めた書物殿、高名な日系米人彫刻家イサム・ノグチ氏設計の彫刻庭園などから成る世界的な大博物館で、圧巻は書物殿の死海写本です。

■ベツレヘム　イエス生誕地としてあまりにも有名なこの町はエルサレムの南約8kmの所にあり、立派なドライブコースで結ばれています。現在は誕生地の洞窟の上に大聖堂が建立され、内部の地下には長さ12.3m、幅3.13mの長方形の洞窟が保存されています。

■死海　海ではなく、長さ67km、幅17kmの巨大な湖で、水面は海抜下392mもあるため、上流から運ばれる塩化物が水の24～26%を占めて塩分が異常に多く、魚類は生存しないことから死海と名付けられました。ここで海水浴を行います。人間は絶対に沈みません。

■クムラン洞窟　死海の北、西側の湖畔約10kmの所にクムランの遺跡があります。1947年、2人のベドウィン人がここの洞窟中で亜麻布に包まれた羊皮紙の古文書の入った壺を発見して世界的に有名になりました。この遺跡はイエス在世の当時、エッセネ派（エッセン同胞団）が集団生活と宇宙の法則探求の場所としたところで、イエスも一時期この集団に関係したという説があります。

■ガリラヤ湖　イスラエルの北方に位置するこの大湖はイエスにゆかりのある場所としてよく知られています。彼はこの湖畔で多くの快適な日を送り、かずかずの奇跡を行い、群集に宇宙の法則を伝えました。また何度も湖を渡り、弟子たちと共に家族的な美しい生活をすごしました。あるときイエスはこの湖水を歩いて渡り、弟子たちを驚かせています。私たちは水上を歩くことはできないので遊覧船で周遊します。

■ナザレ　ガリラヤ湖の西方約25kmの山の斜面に存在するこの町には現在アラビア人が住んでいますが、イエスの時代はユダヤ人の町でした。イエスはここで幼少年期をすごしています。父ヨセフの家の跡に聖堂が建てられており、ここから600mほどの位置に聖母マリアの泉が残っています。

以上の他に多数の遺跡を見学の予定です。

「ニュージーランド・オーストラリア大自然の旅」を変更

第5回日本ＧＡＰ海外研修旅行

エルサレム宇宙考古学の旅

宇宙の法則を伝えた偉大な指導者イエスの足跡を訪ねて

●旅行期間　昭和58年８月13日より21日まで（９日間）

●参加費用　¥498,000（分割払い可・月々約¥22,700×24回）
（変動があるかもしれませんのでお含みおきください）

エルサレム！　イエスの宇宙的なティーチングと偉大な事跡を知る私たちにとって、これほどに魅力のある場所が世界のどこにあるでしょうか。一般に知られていないもう一人のイエスは、金星から地球に転生してパレスティナ一帯で宇宙の法則を伝えたあと、エルサレム郊外のゴルゴタの丘で磔刑に処せられてから、金星の円盤の放射線により蘇生してアメリカのデザートセンターに運ばれ、その地のインディアンの部族の指導者として長い生涯をすごした方です。

2000年後の1952年、イエスは金星人オーソンとして、かつての12使徒の１人であったヨハネの転生した姿であるジョージ・アダムスキーとデザートセンターで会見しました。この壮大な宇宙的ドラマの根源地は2000年前のパレスティナで、その中心はエルサレムです。この都市の内外はイエスと使徒たちの活動の本拠であり、かず多くの遺跡が残っています。

特にイエスが十字架の横木を背負わされて歩きながら途中３度倒れたビア・ドロローサ（歎きの道。十字架の道ともいう）と磔刑をとげたゴルゴタの丘（現在は聖墳教会）こそは私たちにとって地球最大の聖地であり、ＧＡＰ会員必見の場所です。倒れたイエスを母マリアが抱き起こして激励した地点や、イエスを思慕していた女性ベロニカが師の血と汗をふくためにスカーフを差し出した場所などはランドマークにより示されています。

エルサレムは3000年前にダビデ王とその子ソロモン王により繁栄した史跡に満ちた都市ですが、私たちはここ以外にもイエスの生誕地ベツレヘムや少年時代をすごしたナザレなどを訪問し、イエスが多くの奇跡を行ったガリラヤ地方の見学と風光明媚なガリラヤ湖の遊覧船による周遊も行います。死海での海水浴も一興です。

地球に生をうけて宇宙の法則を探求する日本ＧＡＰ会員の皆さん、金星人イエスの足跡訪問を今年最大のハイライトとして実現させようではありませんか。久保田八郎とベテラン添乗員・田中正が徹底的に検討して企画したＧＡＰだけのこの手作りの研修旅行にぜひご参加ください。次元の高い多数の会員の方々の参加がすでに内定しています。旅行中は久保田と田中が親身のお世話をし、現地では優秀な日本人ガイドが案内しますし、参加申込者には説明会で詳細なインフォメーションをお伝えします。

イスラエル国内は日本と同じほどに治安が良好で、年間120万人の外国人観光客が訪れています。毎日３食付きで安心して素晴らしい旅が楽しめます。ＧＡＰ独特の調和と友愛に満ちた感動の日々を聖地ですごそうではありませんか。

※ハガキで案内書を日本GAP宛お申し込み下さい。　　日本ＧＡＰ会長　団長　久保田八郎

企画●日本ＧＡＰ
（運輸大臣登録一般旅行業第２号）

主催●株式会社日本旅行

販売
旅行代理店●ワールドビジネストラベル株式会社
（運輸大臣登録第第代理店業第195号）

日本ＧＡＰ全国月例研究会案内

支部名	日　　時	会　　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第1土曜日 午後2：00÷6：00	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03—828—2111。国電「上野駅」の「公園口」下車，改札口の真向かいスグ。	￥300	2：00→3：00会員による体験講演， 3：00→4：30久保田会長の「宇宙哲学」講義と近況報告，テレパシー練習，休憩。 4：30→6：00自己紹介，意見発表，質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」☎（388）7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝平塚和義　☎06—436—3478	300	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」(文久書林刊）を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00	新潟駅前「青年の家」☎0252—44—6766 連絡先＝足立亘宏　☎0252—62—0968	200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレパシー練習，座談会。
熊本支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	熊本市二本木3—12—45　常通寺 連絡先＝津野田俊行　☎0963—52—3381	200	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」(文久書林)」を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1：00→4：30 ※4月は支部大会のため月例会は中止。	名古屋市中区古沢町7—1「名古屋市民会館」特別会議室。☎（052）331—2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩5分。 連絡先＝林　国寛　☎0586—45—6468 武田充弘　☎052—622—7339	300	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」「宇宙哲学」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表，テレパシー練習，座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1：10→4：20 ※5月は支部大会のため月例会は中止。	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可　☎0222—95—0725	200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，テレパシー練習，座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1：00→5：00 ※5月は支部大会のため月例会は中止。	山形市小白川町「社会福祉文化センター」山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。☎0236—42—5181 連絡先＝清水　正　☎0238—21—5441 ※11月のみは山形市立図書館 0236-24-0822	200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開，テレパシー練習，研究発表，座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1：00→4：30	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。☎011—241—9171　連絡先＝伊藤重信　☎011—742—0192	300	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」と官製ハガキを持参。読書会，テレパシー練習，自己紹介。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1：00→5：00 ※5月は支部大会のため月例会は中止。	プラザー静岡ビル8階（静岡駅北口すぐ）静岡市御幸町9—1 連絡先＝野口敏治　☎0542—86—7729	200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習，研究発表。
旭川支部	毎月第2日曜日 午後1：00→4：00	旭川市6条14丁目「大成市民センター」（ニチイ旭川店）☎0166—24—1585 連絡先＝石川公一　☎0166—51—5699		東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表。アダムスキー著「宇宙哲学」を持参。質疑応答（旭川支部独自で直接会長から回答を得る）別会場にて2次会。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1：00→4：30 ※3月は支部大会のため月例会は中止。	松山市民会館会議室 連絡先＝伊藤逸夫　☎0898—22—3060	200	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。質疑応答，座談会。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後2：00→6：00	群馬県太田市「太田市民会館」第6会議室。 連絡先＝服部　久 ☎0276—63—2163・2771	200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，座談会等。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室(2)　☎0177—34—0163 連絡先＝中根　豊　☎01756—3—3386		テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレパシー練習，研究発表，座談会。
沖縄支部	毎月第3日曜日 午後1：00→6：00	沖縄県宜野湾市真栄原80、下地算数教室 ☎09889—7—6478 連絡先＝新里義雄　☎09893—8—2511	500	テキストとして「宇宙哲学」久保田先生による宇宙哲学解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレパシーの研究報告。自己紹介。座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1：30→5：00	秋田市山王7—3—1「秋田市文化会館」和室会議室。☎0188—65—1191 連絡先＝佐藤春雄　☎01889—2—3284	200	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習。座談会。
(関東支部改称) 神奈川支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	神奈川県川崎市川崎区富士見2—5—2「川崎市立労働会館」第1研修室 ☎044—222—4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前。 連絡先＝田光明　☎0468—36—7198	400	テキストとして「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。研究発表，座談会等。

★本誌バックナンバー(旧ニュース)★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。

No.76 主要記事「土星旅行記」(2) G.アダムスキー／1981年度「日本GAP総会講演集」伊藤宣信・山口 緑・武田克弘・足立巨宏／「総会の日にUFOを目撃」伊藤通夫・仲間秀樹・横口真市・松村芳之／「さらば空飛ぶ円盤」(4) G.アダムスキー第5章わが太陽系内の変化・第6章異星人の象形文字／その他。

No.77 主要記事「金星には偉大な文明がある!?」／「宇宙と愛について」(1)久保田八郎編／「反磁場による超推進法」W.ラポート／「さらば空飛ぶ円盤」(5) 第7章 疑う人に対する回答・第8章 デマとデマ流し屋／その他。

No.78 主要記事「火星に生命が存在」／「私は異星人から何を学んだか」G.アダムスキー／札幌市でアダムスキー型円盤目撃さる／アダムスキー型円盤、旭川に出現！／沖縄支部大会の日に葉巻型母船現る！／「宇宙と愛について(2)」／「波よ静まれ、そして風も」久保田八郎

No.79 主要記事「イエスの聖骸布の謎」久保田八郎／「聖書とUFO」G.アダムスキー／「宇宙と愛について」(3)／「円盤につきまとわれた日」／「謎の巨石と太陽円盤の国へ」その他有益な記事を満載。

各￥700。※バックナンバーに限り送料は不要

「宇宙哲学」解説講義録音テープ

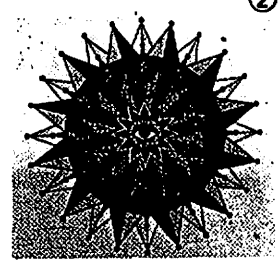
昭和58年度東京月例研究会において1月より毎月1～2章ずつ久保田会長が解説される録音テープです。アダムスキー哲学の理解を深める上の最重要な資料。会長の平易な説明と深遠な内容をぜひお聴き下さい。近況報告も含まれています。各支部必須のテープ。

テープ1本(90分)　￥1000　〒200

※このテープの注文に限り××月分と記して必ず下記へご注文下さい(58年1月より毎月録音。第1章より在庫)。

〒430 静岡県浜松市寺島町221、小島国弘
TEL.0534-52-8502/振替名古屋7-51065

①



②

①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①￥500〒120 ②￥200〒60一括注文の場合〒120

③想念観察手帖

アダムスキーの宇宙哲学にもとづいて自己の想念印象を観察し、宇宙的想念と非宇宙的想念とに分類して記入する。宇宙的テレパシックな人間になるための必携品。1冊で1カ月分の記入が可能。￥500 〒120

④テレパシー練習用ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。
美麗箱入り。
￥500 〒120

日本GAP

会員募集

日本GAP会員募集
会の大会参加・久保田八郎先生講演会・研究会・月例会・講演会・研究会・ビデオ・テープ・ビデオ・テープ・ビデオ・テープ